

## 人類と社会・・・古代

### 1. 初めに言語ありき

初めに言(ことば Logos)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。…… (新共同訳聖書／ヨハネによる福音書 1.1-4)

「サルと別れた日」では、言語を獲得したクロマニヨン人が言語による意思疎通を発達させ、血縁関係を越えた社会性を発達させ、氷河時代の厳しい生存競争を勝ち抜き、世界各地へ拡散し、やがて地球の温暖化時代到来と共に狩猟採集時代を終えて植物栽培により集団の定住生活に入る状況を見てきました。狩猟採集時代の集団の規模は数十人であったようで、あらゆる意思疎通は言語だけで充分に行うことができたでしょう。

定住生活の初期には規模が数百人程度であれば、遺跡の調査でも人々の間には支配・被支配の関係は希薄であったようで、社会はそれほど複雑でなく、意思疎通は言語だけで充分であったようです。9,000年前頃の時期の重要な構築物として共同墓地が発掘されており、構成員にまだ上下関係がないフラットな集団であったことを窺わせています。

恐らく 7,000 年前までには、銅や金や銀が贅沢品として採鉱されました。入念に作られた墓地でそれらを発見できます。その少し後、動物に引かせる木製の犁(すき／“鋤”も同じ)が現れ、荷車と轆轤(ろくろ)がそれに続きました。やがて人口の増加により集団は年々発展して何万人という規模になり、メソポタミア(イラクのチグリス河、ユーフラテス河に挟まれた地域)の南部に**世界最古の都市**であるエリドゥ、ニップール、ウル、ウルクなどが出現します。この頃になると、権力者がその事績を誇る記念物や豪華な墓が発掘され、人間社会に支配・被支配の関係が発生したことが認められます。

### 2. 必要から生まれた文字

これらの都市を築いたのは**シュメル人**です。都市というものは高度に分業化・組織化した社会システムです。そこでは原材料、製造品、労働者、兵役、田畑、租税、王室や寺院の財産目録、収入と支出などの処理・管理をしなくてはなりません。これまでのように言語を記憶する方法では、もはや管理不能となり、以前とは全く異なる新しい方法が必要となりました。

最初に必要になったのは、特定の人物または集団の所有を表す記号でありました。円筒の表面に所有を特定する記号を彫り込んだ**円筒印章**(粘土などが柔らかい間に表面を転がして記号を付ける)が多数見つかります。

**世界最初のシュメル文字**：やがて文字も出現してきます。右の写真は、イラク南部のキシュ近くで出土した 5,300 年前の粘土板です。まだ、商品と数量が判る絵文字の域を脱していませんが、これが出土品として残された人類最古の文字といえるものです。これら初期の粘土板には、少なくとも 1,500 の異なった絵文字と象徴があり、それぞれが 1 個の具体的な対象を意味する単語を表現しています。これは**特定の単語**を表す**表語文字**です。

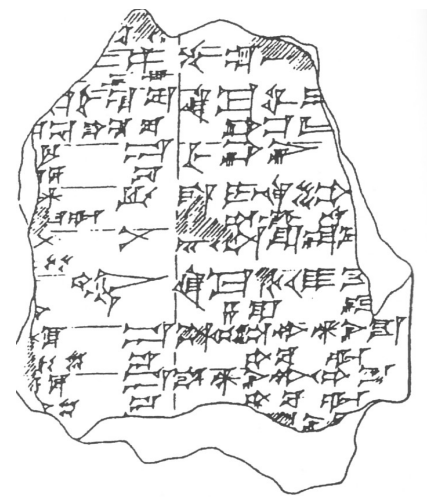
こんな煩雑な方法では、抽象的な考えや、名前などを伝えるのが難しかったので、やがて、記号を単に**特定の発音**に対応させる**表音文字**となり、本格的な文字



**最古の文字板**  
(「文字の歴史」 p35)

へと発展します。

日本語の場合でいうと、「木」「林」「森」は木、林、森を意味する単語を表す表語文字です。表音文字とは、表語文字である漢字「伊」を「イ」に、「呂」を「ロ」に、「八」を「ハ」に転用して、単語の意味から離れて音だけのカタカナの「イ」「ロ」「ハ」を表す使い方をする場合を言います。参考までに、同じ表音文字である平仮名の「あ」「い」「う」「え」「お」は、漢字の「安」「以」「宇」「衣」「於」を簡略化したもので、カタカナも平仮名も、共に平安朝時代の初期に日本で作られました。



楔形文字（「文字の歴史」 p69）

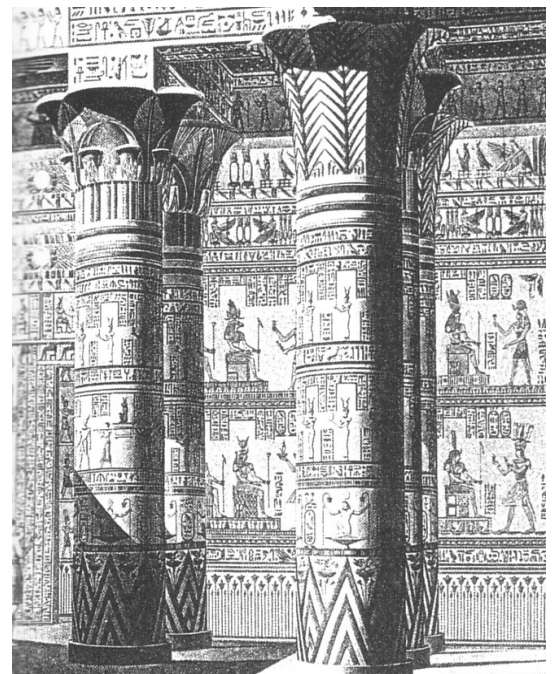
前頁の粘土板は最古の出土品であり、当時のシュメル文字は未だ筆記用具の尖った先端で引っ搔いて線で絵文字を描いていますが、やがて、

右の粘土板はアッカド人の生徒たちにシュメル人の先生がシュメル文字を教えるための教材として使用したもので、二カ国語を左右に並べて書いてあります。この文字を**楔形文字**（きっけいもじ）と呼びます。

楔形文字では余り複雑な形状は書けません。絵と象徴から始まった文字も、必然的に単純な記号で表せる表音文字へと変化して行きました。

やがて、この精巧な表音文字はシュメル語と全く無関係な言語に借用され、文字という概念が世界中に広がります。

書字方式もいろいろ試みられました。右から左へ横方向に書き、粘土板の端へ来たら改行する方式、同じく左から右へ横方向に書く方式、右から書き始めて端へ来たら行を下げて左から右へ書く牛耕式と呼ばれる方式、縦に書き下がって区画の下端にきたら改行して左の上端から書き始める方式と各種の書字方向の記録が出土しています。最終的には中東では右から左へ書く書字方式が標準方式となって定着しました。



神殿のヒエログリフ（「文字の歴史」 p56）

**エジプト文字：** エジプトはシュメルから表語文字、表音文字、書字方式という概念を借用して前5100年頃にヒエログリフ（神聖文字）を作り上げます。エジプト語固有の必要性から説明は省略しますが、頭音法、決定詞を加えます。26個の単子音記号を頻繁に使うことが現代に引き継がれている古代エジプトの顕著な発明です。エジプトでは葦から作ったパピルスにインクで書きました。

**エジプトの古代文字は3種類ある**

ヒエログリフのほかにも、エジプトには「ヒエラティック」、「デモティック」という古代文字があったことが知られている。この3種の文字は、しばしば併用して用いられた。ヒエラティックは、ヒエログリフをくずして書いた文字で、漢字でいえば「行書体」にあたる。一方で、デモティックは、このヒエラティックをさらにくずしてえがかれた文字で、漢字でいえば「草書体」に相当する。ヒエラティック、デモティックとくずされていくにしたがって、ヒエログリフのもつ絵文字的な印象はうすくなっている。右にその具体例をいくつかあげた。

|     | ヒエログリフ | ヒエラティック | デモティック |
|-----|--------|---------|--------|
| 子ども |        |         |        |
| 女性  |        |         |        |
| 頭部  |        |         |        |

※ここに書いたのは一例で、同じ意味をもつヒエラティックやデモティックでも、時代や場所がことなれば、デザインもちがっていた。

このため、線で書ける文字になります。線で書く文字は彫刻にも向いています。前頁の右中図は世界で最も美しい文字だといわれるエジプトのヒエログリフが神殿の壁に書かれている状況を示します。この文字では現代の日本語と同じく、**表語文字と表音文字が混じって使用**されています。

エジプト文字にも、日常の書き物に相応しい他の2種類の文字体系がありました。前頁の下図に、代表例によりそれらの関係を示しています。

記録方法としての軟らかい粘土板に筆記用具を押しつける方法と、パピルスにインクで書く方法とが何千年も競い合いました。インクが勝ち残って、現在の印刷の基盤技術となっています。

楔形文字は約 2,000 年前に絶滅しました。

エジプトの子音のヒエログリフは、それとは気付かれない形で、未だに書かれて(現代人が使って)います。古代のエジプトは裕福な大国であり、仕事を求めて周辺各国から商人や傭兵が大勢エジプトにやって来ました。エジプト文字の表意文字は流用困難でしたが、表音文字は彼らの母国語にもそのまま流用可能なのです。考古学者により、各地でエジプト文字を表音文字として自分たちの母国語に適用して傭兵隊の伝言等のために書き残した遺跡が発見されています。彼らが表音文字を母国に持ち帰り、必要な修飾を施して文字として使って行ったのです。これらの前段階があって、約 4,000 年前にエジプトの配下であった**セム民族がアルファベットを完成**させました。アルファベットは単に話し言葉を再生する一方法に過ぎませんが、たまたま、殆どの言語にとって適用が容易であるため、世界中に広まりました。

**漢字：**ここで現代、世界で流通している文字の大きな潮流のもう一方の旗頭である漢字にも触れましょう。漢字は 3,400 年前頃に突然、完成した形で出現しました。シュメルの文字のような完成するまでの粒々辛苦の多数の試行錯誤の過程が発見できないのです。

その点はエジプト文字と同じで、**文字という概念が他から伝搬してきた**ことを示唆しています。

漢字の大多数は二つの部分から作られ、左側の要素を偏(へん)、右の要素を旁(つくり)と呼びます。鯛の偏は魚、旁は周です。

この緩やかなルールで色んな人たちが自分好みの文字を作って流通させたために、紀元前(以下“前”と略)300 年頃には文字の多様化が進み、中国人がお互いに読めないという事態に陥りました。**秦の始皇帝**は前 221 年に「文字の大改革」を行い、人々を統一するための一手段として**中国文字の標準化**を断行しました。この文字が後に続く全ての中国文学の祖になります。

|                  |   |   |   |   |   |   |   |
|------------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 紀元前 1400～800 年   | 𣎵 | 火 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 |
| 紀元前 800 年        | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 |
| 紀元前 800～220 年    | 𣎵 | 火 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 | 𣎵 |
| 紀元前 209 年        | 澤 | 火 | 雷 | 風 | 水 | 山 | 地 |
| 紀元前 200 年        | 澤 | 火 | 雷 | 風 | 水 | 山 | 地 |
| 紀元前 200～紀元 200 年 | 澤 | 火 | 雷 | 風 | 水 | 山 | 地 |
| 紀元 100 年頃        | 澤 | 火 | 雷 | 風 | 水 | 山 | 地 |
| 紀元 400 年頃        | 澤 | 火 | 雷 | 風 | 水 | 山 | 地 |

漢字の変遷 (「文字の歴史」 p225)

殷代の文字数は 2,500 字強でしたが、120 年頃の許慎の字書には 9,353 字が載っており、12 世紀には約 23,000 字、1716 年の「康熙字典」には約 47,000 字、1990 年の中国の辞書には約 6 万もの漢字が載っています。中国語は開放的で、幾らでも自由に作ることができる文字なのです。しかし、実際に使われている漢字の数は、その十分の一に過ぎず、一般の人が判る漢字は更にその三分の一といわれています。

最初の中国文字は墨と筆を使って、竹片(竹簡ちくかん)、木片(木簡もくかん)に書かれていましたが、105 年に漢の**蔡倫**(さいりん)が発明した**紙が世界標準**となりました。

西欧のアルファベットがほぼ完全に機能的であるのに対し、表語文字である中国文字は機能性と芸術性を併せ持っているのです。中国社会では優れた書家はしばしば国一番の画家や詩人よりも尊敬されています。



中国は広大な国ですから、同じ文字を使っている、その読みの発音はどうしても地方色豊かなものになります。現代の中国語の七大方言といわれるのは、北京語、上海語、江西語、湖南語、福建語、広東語、客家語で、お互いに殆ど通用しません。それぞれの違いは、ローマ帝国では2世紀頃には共通のラテン語であったものが、現在のイタリア語、フランス語、スペイン語(これらはラテン語系と共通に括られる)に分岐して行ってしまったのと同じ程度に異なるといえます。

私が台湾に居たときに経験しましたが、北京語を使う台湾の人たちと、広東語を使う香港の人々の間で会話が成り立たず、結局、お互いに英語で会議を始めました。

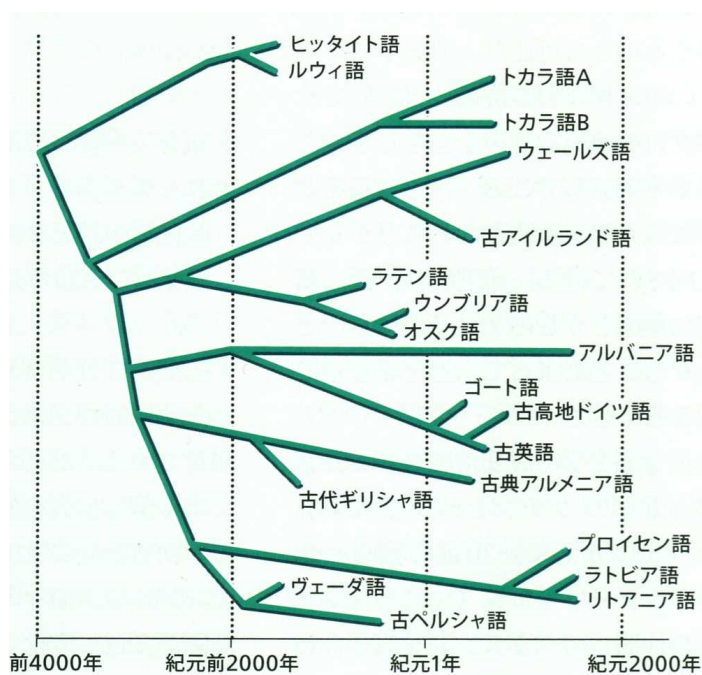
会議の事前準備はファクシミリを使って文字で遣り取りしており、この段階では同じ文字を使うため何の支障もなかったのですが、話し言葉での会話は全く通じなかったのです。

台湾では北京語の判らない高年齢の人たちのために、全てのテレビ番組の画面の下方に漢字のスーパーインボウズ(字幕)が入っていました。

ここに大事な真理が見られます。音声は人間の記憶によって運ばれた時代は、音声は正確性の保持ができず、ある程度の距離になると必ず変形して方言ができました。

一方、文字はどれだけの距離を移動しても、一切、変形がありません。始皇帝が広大な中国を統御するために文字の標準化を実施したのは素晴らしく賢明な事業でした。

今では、各種の音声メディアで如何に広大な地域でも音声の標準化が可能になっており、共産政権の中央政府は、北京語を普通語(標準語)として普及させています。初等教育による世代交代を待たねばならぬので、多少時間がかかりますが、その内に中国全土で中国語は発音の点でも北京語に標準化されるでしょう。



言語の系統樹 (日経サイエンス 2009/4, p94)

言語が分岐して行く様相をインド・ヨーロッパ語

族を例に示したのが右図「言語の系統樹」です。(各種の学説の中の一つです)

本章で参考にした文献：

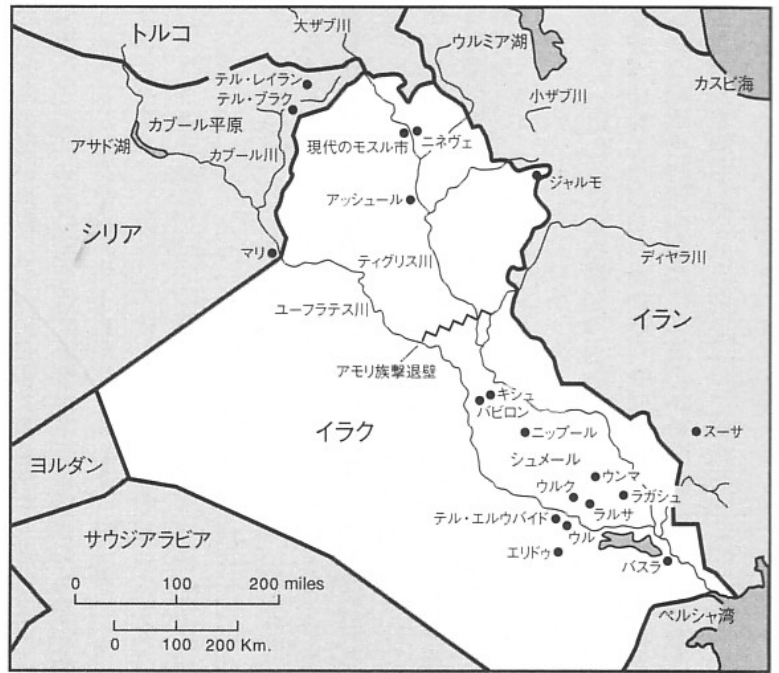
「文字の歴史」 S.R.Fischer／鈴木晶訳：研究社



### 3. 人類最古のメソポタミア文明と中東文明

9,000 年ほど前から、中東ではチャタル・ヒュ  
ユク(トルコ中部)やイエリコ(イスラエル)な  
どの都市的居住地(町) が出現します。

7,500～7,000 年前にはメソポタミアで灌漑  
が行われ、人工的な運河が存在していたこと  
が知られています。南部の共同体ではごく初  
期の時代から、村の指導者がまとめ役となっ  
た共同作業を行っています。その甲斐あって、  
大きな共同体には堂々とした建物や小さい神  
殿が出現します。5,900～5,400 年前には南メ  
ソポタミアの人間(約 50 万人)の約 5 分の 4  
が、1,000 人以上の人口を有する 10ha(ヘク  
タール: 10,000 m<sup>2</sup>)以上の居住地に住むようにな  
ります。**都市革命が起こった**のであり、文明と  
いう言葉に結びつけられる特徴の幾つかが見  
られるようになります。「サルと別れた日」  
の巻末にあった「エリドゥ、ニップール、  
ウル、ウルク」など世界最初の都市の人口は  
7,000～2 万人と我々の水準から見ると少ないのですが、これが世界最初の都市群であるのは間違いありま  
せん。シュメル人の人口は約 50 万人、世界の総人口が約 1 億人(現在の 70 分の 1) の時代です。



メソポタミア文明圏 (『古代文明と気候大変動』 p187)

右図はメソポタミアの住人、シュメル人の服装です。カウナケスと呼ばれた  
腰衣は厚ぼったい毛房が垂れ下がるように施された織物で、様々な種類があ  
り、重層の毛房のものを巻いている人は王でした。腰衣は背後で結びます。  
男性は腰衣だけです。女性は両肩、あるいは左肩に布を掛け、巻き布で身体  
を覆っています。

メソポタミアは、暑い地域です。真夏は昼間は 50℃にもなり、夜でも 30℃  
位あります。年間降雨量は 150 mmと少なく、天水農耕は無理で、灌漑が不可  
欠です。沖積平野の肥沃な土地は灌漑すれば驚異的な大麦の収穫を生む豊饒  
の土地です。シュメル人は牛に犁を引かせ、種まきに条播器を用いるなど、  
進んだ農業技術を持っていました。4,350 年前頃には 1 粒の大麦が 76 粒に  
なる収穫が得られています。これは中世の西欧の収量倍率より 1 桁大きい値

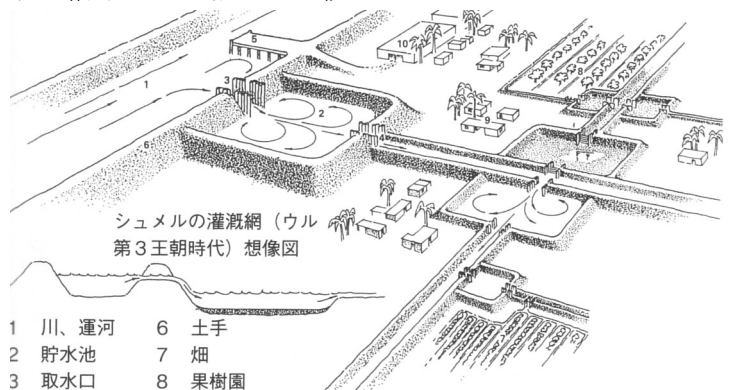
です。しかし、**灌漑農業**には水に含む僅かな塩  
分が長期間にわたって蓄積する**土壌の塩化**とい  
う大問題があり、4,100 年前頃には収穫倍率は  
30 倍まで低下してきました。

参考までに、東南アジアの水田での稲作は塩分  
の蓄積がない持続性ある理想的な農法です。

右図にシュメルの灌漑設備を示します。  
このような大規模な工事は権力の集中がなけれ  
ば可能になりません。



(『5000 年前の日常』 p56)



シュメルの灌漑網 (『5000 年前の日常』 p32)

灌漑農業を媒介として人類社会に階層化が起こり、約 4,900 年前(前 2900 年)に王政が成立しました。

歴史書では、前 2900 年以降を「初期王朝時代」、

前 2500 年以降は「ウルナンシェ王朝時代」、

前 2334 年以降は「アッカド王朝時代」、

前 2112 年以降は「ウル第 3 王朝時代」

としています。(前 2112 は西暦紀元前 2112 年を意味し、慣習によりコンマを入れません)

次の世界最古の神話には、それまで比較的各人の権利が平等であった人類社会に王政が成立する過程が窺えます。

……ギルガメシュ叙事詩は紀元前 1800 年頃書かれたものだが、事実なのか後世のイデオロギーなのかは別として、この間の事情を詳しく伝えている。ウルクのエンとして身を起こすギルガメシュは、都市キシュから仕掛けられた攻撃に対する抗戦の指揮を執る。彼は大きな決定を行うに当たって、始めは長老たちの評議会と男子住民全員集会の許可を求めなければならない。しかし彼の勝利が彼の権威を押し上げる。戦利品の分配と、その後の半永久的防御壁の建設によって、彼は私有の資源を手に入れ、それによって代表者としての自分の権威を徐々に強制力へと転換して行く。この一部は事実であることが判明した——この伝説の中でギルガメシュの建造とされているウルカの町の防壁は、正確にこの時期のものと算定されたのである。紀元前 2500 年までに 12 程の都市国家が専制者としての自負をもつ王を戴いていたらしいことが、史料証拠で明らかである。彼らは軍事闘争を行って、幾人かは一時の覇権を獲得したようである。軍事体制が頂点に達するのは最初の大帝国アッカドのサルゴン王であるが、……

(「ソーシャルパワー(I)」 p122)

王政はその支配地を開発・改良・防衛するための装置です。防衛されている地域の財が魅力的であれば、力で勝る他の勢力に攻め込まれ、征服されることがあります。

そのようにして、これから後の人類の歴史は最も大きな出来事である戦争を軸として語られるようになります。「**人類の歴史とは戦争の歴史だ**」とまで極論されることがあります。中東の肥沃なこの地域は周辺の貧しい土地に住む精悍な狩猟民族にとって垂涎の獲物です。シュメル人も自分の土地を必死に守りますが、前 2004 年、エラムの侵入によって「ウル第 3 王朝」は終焉を告げ、シュメル人たちは町を捨てて他民族に吸収されて行きました。運河



バビロンのイシュタル門 (ドイツ・ペルガモン博物館)

には泥が溜まり、町は崩壊して、どこまでも平坦な砂漠には瓦礫の山だけが残りました。20 世紀の初めに考古学者が発掘するまで、人類は文明が始まった場所を忘れてしまったのです。

前 2000 年以降は「古バビロニア時代」で、首都バビロンはユーフラティス河のはるか上流にあります。前 600 年(2,600 年前)の世界最大都市バビロンの人口は 8 万人と推計されています。人類の総人口が約 2 億人の時代です。

中でも「バビロン第 1 王朝時代」のハンムラビ王は「**ハンムラビ法典**」の編纂者として有名です。これは記録に残る世界で二番目に古い成文法で、282 条(文字は縦方向に書かれている)から成っています。恣意的な政治・司法を行わず、文書化された法律に従って透明性が高い政治を行おうとしたものです。

「目には目を、歯には歯を」の条文が有名ですが、当時の復讐の慣習は倍返しでしたから、過剰な報復による報復の無限循環を禁止する穏和な精神に基づく法律でした。前頁の写真(私の撮影)は首都バビロンの城壁の大門(ドイツへ移築された)です。前 1000 年以降は「新アッシリア帝国時代」、前 625 年以降は「新バビロニア王国時代」で、「旧約聖書」にある「バビロン捕囚」(第一回：前 597/第二回：前 550)がこの時期に当たります。前 550 年にアケメネス朝ペルシャによる中東支配が始まります。

**銅の利用：** イラン高原では既に 6,000 年前には豊富な銅から斧などが鑄造されていました。5,500 年前にはメソポタミアでも銅工芸が発達しています。銅に錫を混ぜた合金は青銅で、錫の含有比により粘り強い刃を作ったり、硬度を増したりできます。青銅器時代です。

**鉄鋼の利用：** 鉄は隕石に含まれており、それ自体は未知ではありませんでした。約 5,000 年前の赤鉄鉱製の分銅が発掘されています。アナトリアではハッティ人からヒッタイト人に、炭火を使って鉄を鍛え、炭素を含んだ鋼を作る技術が伝えられました。ヒッタイトは鋼の鑄造技術を国家秘密として独占し、武器に使用して軍事的に優位に立ちます。鉄器時代の始まりです。前 1200 年頃(3,200 年前)にヒッタイトが滅亡した結果、この技術が古代オリエント(中東)に広がりました。化学者がいて理論が理解できていた訳でもないのに、鉄の精錬という高度技術を発見と経験だけでここまで発展させた古代人の力に感服します。

**軍事技術の成立：** メソポタミアの王サルゴン(在位は前 2334~2279)はアッカド帝国を建国した古代オリエント史上、最重要の王です。彼こそが世界で**最初の軍事支配帝国**を築いた人物です。アッカド王朝は拡大したメソポタミア帝国をほぼ 2 世紀にわたって支配し、ウル第三王朝、バビロン古王朝、カッシート王朝と引き継がれました。アッカド人もカッシート人も、辺境から来た労働民として現れ、次に植民者となり、最後は征服者となっています。彼の軍事技術について、以下の文を参考にしてください。

……サルゴンは自慢話を二つ残していて、自分の偉業が実はある程度ロジスティクス(物流)に関わっていたことを示している。ニップルの神殿の銘板には「5,400 人の兵士たちが毎日彼の面前で食事をした」と書かれている。そして初期の王たちの年代記には「彼は行軍 10 時間分の距離毎に宮廷役人を配置し、土地の諸部族を統合して支配した」と書かれている。……兵士の人数、その兵士たちが兵站部によって永続的な補給を受けていたという事実、そしてその兵站部も永続的かつ空間的に組織されていたという事実が、事柄の斬新さを表している。大規模なプロの軍隊と管理機構の出現である。……エンゲルの計算に依れば、軍隊規模とは大筋で無関係に、兵士たちと随伴民間人たちが運搬できる自分たちの食糧は 2.5 日分だった。4 日分ともなれば、かなりの数の荷物運搬用動物が必要だった。……完全自給の軍隊の生存期間は 3 日だった。これはギリシャ軍とローマ軍の食糧配給システムによっても確認できる結論である。……これが世界を征服する大領域帝国について我々が築き上げるイメージの、全くありのままの基盤なのである！……エンゲルの計算によると、アレクサンドロスの場合は、随伴員(戦闘員 3 人に 1 人付いた)を含むおよそ 65,000 人の全軍で 1 日平均およそ 24 km である。……トトメス 3 世のエジプト軍は 1 日 24 km、ラムセス 2 世のエジプト軍は 21 km、バビロニア軍で 29 km、後代のローマ軍で 23 から 32 km である。……

(「ソーシャルパワー(I)」 p148~154)

船で荷物を運搬できる場合は事情が変わってきます。歩兵を主力として陸地で行われた軍事行動は、鉄道や自動車が出現するまでは、ここに書かれた域を超えることはありませんでした。

**古代都市ウルを襲った環境災害：** ウルはユダヤ民族の祖先アブラハムの出身地です。ウルに関しては次のような状況が記録に残され、或いは考古学的に判っています。



……5,800 年前頃、インド洋のモンスーンの進路が南方へ移動し、降雨のパターンが変わった。……雨が降らず、作物が畑で干涸らびるようになれば、どんな混乱が生じたかは想像できるだろう。村人は発育の悪い作物を刈り入れ、その数週間後の、もう手遅れとなった時期に、漸く川が氾濫して水路に水が溢れるのを眺めることになった。数年も経たないうちに、彼らは播種の時期をずらし、丹念に手入れした用水路をティグリス川とユーフラティス川が満たす頃に、小麦と大麦が実るように工夫し始めた。同時に、彼らは分別と智慧を働かせ、支流運河で貴重な水を周囲の沙漠まで引ける場所の近くに移動し、より大きい町や都市を築いた。ウルのような成長都市は人々の暮らしの中心となり、その周囲はすっかり耕作地で覆われ、近郊の共同体は城壁から 10 km 先まで続くこともあった。……4,400 年前頃、どこか北方で大規模な火山の噴火があり、大気中に細かい灰が大量に噴出した。……ウルの君主にとっては不幸なことに、噴火と同時に 278 年間にわたる干ばつが始まり、……干ばつは、嘗ては肥沃だったユーフラティス川沿いのハブール高原を、沙漠に近い状態に変えた。……農民は農地に流れ込む水の量を増そうと、懸命に用水路の手入れをした。楔形文字の刻まれた銘板によれば、市の当局は配給する穀物をテーブルスプーンで計るようになった。……やがて彼らは無法な手段に訴えるようになり、食糧探しに血眼になりながら奥地に移動した。……ウルの農業経済は揺らぎ、やがて崩壊した。……この時、初めて都市が丸ごとそっくり崩壊したのだ。……（「古代文明と気候大変動」 p24~26）

……シュメルの地を発掘したレナード・ウーリー卿はこう記す。「メソポタミアの沙漠を見たことのあたる人間には…過去と現在のコントラストが激しすぎて、古代社会は殆ど信じ難いものに思える。…もし、ウルが帝国の首都で、シュメルが嘗て巨大な穀物庫であったなら、何故人口がこれほどまでに希薄になり、土そのものが生産力を失ってしまったのか？」彼の問いにはひとことで答えることができる。塩である。河川は岩石や土壌から塩分を洗い出して海へ運ぶ。ところが、人間が水を乾燥地帯へ引き込むと、大量の水分が蒸発して、後に塩分が残る。良好な排水と、長い休耕期間と、土地を洗い清める十分な降水量がない限り、灌漑地というのは未来の塩田に他ならない。イラク南部は、世界で一番灌漑をやってみたくなる場所の一つであると同時に、それを維持するのが一番難しい場所の一つであった。「進歩」が仕掛けた史上で最も魅力的な罠の一つだ。数世紀にわたる大豊作の後、大地は耕作者たちに逆らい始めた。問題の最初の兆しは、炭鉱労働者のカナリアにも似た役割を果たす小麦の収量減少であった。時と共に、シュメル人は小麦より塩分に強い大麦への乗り換えを余儀なくされた。紀元前 2500 年(4,500 年前)までに作物中に占める小麦の割合は僅か 15% となり、紀元前 2100 年にはウルの小麦生産は完全に放棄されていた。……（「暴走する文明」 p94~95）

#### この章で参考にした文献：

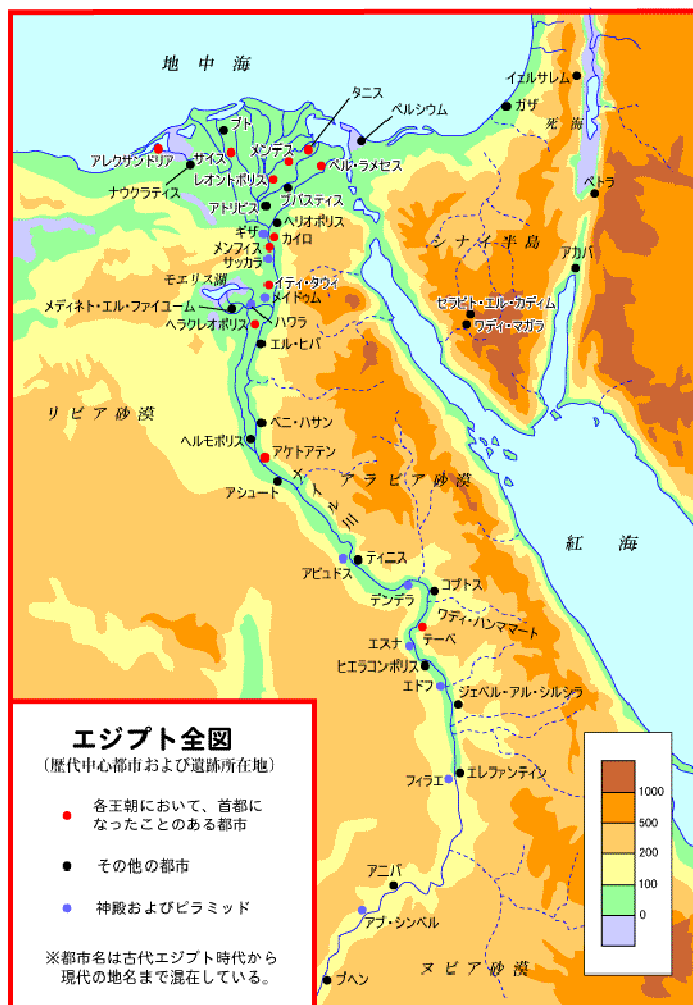
- 「古代文明と気候大変動」ブライアン・フェイガン／東郷えりか訳：河出書房新社
- 「ソーシャルパワー(Ⅰ)」マイケル・マン／森本醇・君塚直隆訳：NTT 出版
- 「5000 年前の日常」小林登志子／新潮選書
- 「暴走する文明」ロナルド・ライト／星川淳訳：NHK 出版

#### 4. エジプト文明

ユーラシア大陸で、互いに独立して発生した人類の集団のうち、①読み書きし、②都市があり、③儀式センターを持つもの、即ち、文明といえるものは**メソポタミア文明**、ナイル流域の**エジプト文明**、パキスタンの**インダス流域文明**、黄河流域の**殷文明**の四つです。メソポタミア文明は特に早く成立し、文字を始めいろんな文明の成果を地続きの地域に伝搬させたようですが、この四つには独立した文明としての地位を与えて良からうといわれています。これらの文明は**全て河川の流域で興り**、**沖積土農耕**を行った共通性があります。

**エジプトの立地：**エジプトはナイル河沿いの溝地にあり、シユメルシユメルの南西約 1,600 km に位置します。5,000 年より少し前にメネス王がエジプトを統一したと記録されています。この頃、地中海から 700 km 上流の第一瀑布までの区間に約 50 万人ほどの人が暮らしていたと推定されます。ナイル河は上流のエチオピアから年一回の洪水で、大量の栄養分を運んで溝地に残してくれます。通常の洪水であれば、この氾濫原の 3 分の 2 が豊饒な農地となり、エジプト文明を支えました。「エジプトはナイルの賜物」とは、「歴史の父」ヘロドトスの言葉です。ナイル河の水はインド洋の水蒸気を含んだ風が東アフリカの山脈にぶつかって降雨となり、白ナイル(流量 24%)、青ナイル(48%)、アトバラ(22%)に集められて北へ向かって流れ下ります。洪水で氾濫原となるのは凡そ国土面積の 3.5% です。

**洪水農法の利点と欠点：**洪水の水が引いた後に種子を播くこの農法は洪水が大きいときは豊作となり、洪水が小さいと不作になるという天候頼みの不安定さがありました。このため、エジプトは豊饒の地として知られる一方で、しばしば深刻な飢饉に見舞われています。



(Wikipedia)

「この途方もない不幸のために、私、王は悲しい限りである。ナイル河の水は 7 年間もやってこないのだ。穀物の稔りは悪く、あらゆる食糧が不足している。誰もが隣人に対して泥棒になった。彼らは急ごうにも歩くことができない。子供は泣き叫び、青年はのろのろと歩き、老人は頭を垂れたままだ。彼らは曲がってしまった脚を引き摺ってとぼとぼ歩く。宮廷の貴人の会議には誰も来ない。食糧箱の蓋を取っても中は空だ。何もかも食い尽くしてしまったのだ。」 (4,500 年前頃彫り込まれた第一瀑布近くの碑文)

……ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は、どちらも同じ意味でございます。神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです。(ナイル河から上がってきた)七頭の良く育った雌牛は七年のことです。……その後から上がってきた七頭の醜い雌牛も七年のことです。……今から七年間、エジプトの国全体に大豊作が訪れます。しかし、その後、七年間、飢饉が続き、エジプトの国に豊作があつたことなど、すっかり忘れられてしまうでしょう。飢饉が国を滅ぼしてしまうので

す。……このような次第ですから、ファラオは今すぐ、聡明で智慧のある人物をお見つけになって、エジプトの国を治めさせ、また、国中に監督官をお立てになり、豊作の七年の間、エジプトの産物の五分の一を徴収なさいますように。このようにして、これから訪れる豊年の間に食糧をできる限り集めさせ、町々の食糧となる穀物をファラオの管理の下に蓄え、保管させるのです。その食糧がエジプトの国を襲う七年の飢饉に対する国の備蓄となり、飢饉によって国が減びることはないでしょう。」……

(新共同訳聖書／創世記 41・25-36)

しかし、洪水農法は一方で洪水が土壌に蓄積する塩分を溶解して持ち去ってくれるため、灌漑農業の問題点である土地の塩化には無縁でした。農業技術の発達も目覚ましく、13年間を1サイクルとする高度の輪作まで開発されています。単純な灌漑施設も利用されています。

**交通と統治：** エジプトでは洪水の時以外は、ナイル河伝いに国土のどの部分にも行くことができました。水の流れは北向きだが、卓越風は南向きなので帆走可能です。北行きは流され、南行きは帆走します。通信輸送手段として、これほど恵まれた自然条件は考えられません。好条件のもとで、エジプトは繁栄します。歴代のファラオは正義の維持者として成文法による法治国家を運営しました。

収穫高税は大耕作地で約二分の一、小耕作地で三分の一程度であり、これによって王の官僚組織が支えられ、翌年の種子が供給され、飢饉を見越しての長期備蓄も行われています。更に国内生産物（大麦、エンマー小麦、野菜、家禽、鳥獣、魚、等）の交換（市場取引）が国家貯蔵庫を介して行われていたようです。

**ピラミッド：** エジプトといえばピラミッドです。最初のピラミッドは前 2680 年頃、ジュセル王によって作られた階段ピラミッドで、シュメルのジグラットにそっくりでした。その後、形状は洗練され、斜面が直線になり、幾何学的にも芸術的にも優れた建造物となります。ピラミッドは王のお墓にしてはその玄室内で棺が発見されたことはなく、一人の王が複数のピラミッドを作った例もあり、別の目的があるのではと考えられています。

ピラミッドの作り方については詳しい記録が残っています。毎年、洪水の季節になり、農作業ができなくなると、多くの小作農が建設作業員として雇われ、正当な報酬を貰って建設に携わりました。何百kmも離れた採石場で巨大な石を切り出し、筏に乗せてナイル河を下り、船着き場に近いピラミッド建設用地に運びます。職人たちが石に仕上げ加工を施し、土を盛って作った傾斜路の上を大勢が力を合わせて引き摺って運び上げ、所定の位置に石を押し込みます。ギザにあるクフ王のピラミッドは約 300m の高さがあり、200 万個もの大きな石を運んでいます。毎年、3ヶ月間の作業で、建設には 20 年を要しています。これは一種の農閑期の失業対策の土木工事です。奴隷に強制労働をさせたのではありません。小作民も賃金を貰って王に対する忠誠心も強まったろうし、各地から集まった小作民と一緒に働くことで、一つの国民としての連帯感も生まれたようです。

ピラミッドの頂点には、ピラミディオンが置かれます。右の図はアメンエムハト 3 世の治世に作られた黒御影石のピラミディオンで、王の名を示すヒエログリフや、太陽神ラーを象徴する翼の絵が刻まれており、高さ 1.4m あります。また、多くのピラミッドの最外層は磨いた花崗岩で覆われ、太陽の光を受けて燦然と輝いたそうですが、大地震で崩れ落ち、住民に持ち去られて現在のカイロの建物の材料に再利用されています。現在 80 基あるピラミッドの内、最大のものを造ったのは古王国第 4 王朝のクフ王で、在位は前 2589～前 2566 年です。



中王国第 12 王朝時代のピラミディオン (Newton 誌)



古代エジプトは多民族国家でした。ファラオは自らをナイル河の支配者だと定義していました。約千年間の繁栄の後、前 2184 年にナイル河の氾濫の勢いが衰え、約 150 年間、氾濫がごく小規模に止まったために、エジプトは飢饉に見舞われました。中央政府は機能しなくなり、メンフィスではファラオが次々と入れ替わり、国家はそれぞれの地方に分裂しました。前 2046 年に有能な支配者であるメンチュホテプ一世が再統合に成功し、都をメンフィスから南に遠いテーベに移します。

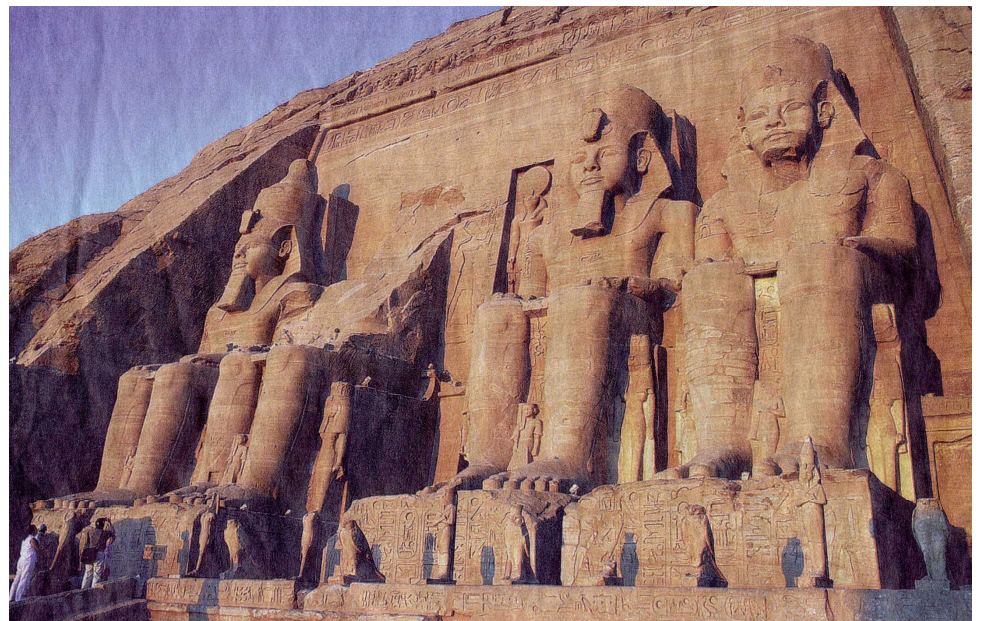
教訓を学んだこの王とその後継者たちは、農業に十分に投資して食糧の貯蔵を中央で管理し、自らを神でなく、民を導く羊飼いと定義し直しました。エジプトの偉大な王たちが栄華を誇れたのは、彼らが現実的であり、豊かな自然の中から民の手で整備されたオアシスを作り出せたからです。こうして約 200 年間の平和な時代が続きます。

**覇権国家エジプト：**その後、約 100 年間、エジプトはアジア系のヒクソスと呼ぶ民族に征服されたが、エジプト人はヒクソスの戦闘方法を学び、撃退します。それからの約 500 年間は外部へ頻繁に戦争を仕掛けて、覇権国家となり、領土を拡大しました。パレスチナやシリアを領土としていた時期もあります。やがて、エジプトの中東支配にも陰りが訪れます。右の「前 2000 年紀の中東」にあるエジプトの支配下にあったミタンニ国が新興のヒッタイトとアッシリアの挟撃を受けて滅亡しました。

エジプトとヒッタイトはキプロスの銅、レバノンの杉などを巡って利権争いを繰り広げたようです。

そこに「ファラオの中のファラオ」と呼ばれるラムセス二世が現れます。古王朝第 19 王朝のファラオで、在位前 1290～1224 年で 90 歳で没しています。子供の数には 160 人という艶福者です。生涯の前半でヒッタイトとパレスチナを巡って争い、一進一退の後、ヒッタイトの王女を王妃として貰い受け、世界史で初といわれる平和条約を結んで撤退

しています。右の今に残る

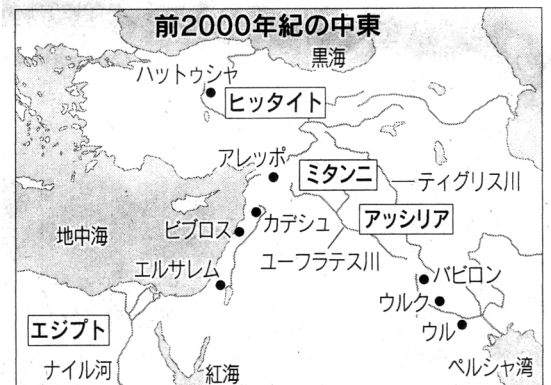


アブ・シンベル神殿のラムセス二世像（2010/1/31 日本経済新聞）

アブ・シンベル神殿（世界遺産）

を建造し、最も多くの戦勝記念碑をエジプトの各地に建てたファラオです。彼の治世がエジプトが最も輝いた時代でした。その後、エジプトは緩慢な衰退期に入ります。

**鉄の発明者・ヒッタイト：**ヒッタイトは古代文明に鉄をもたらした民族として知られています。最近の研究では、彼等はより高度な技術を要する鋼(炭素分が少なく、鉄より粘りがあり強度が強い)の製造にも成功していた可能性が高いとされています。ヒッタイト軍がエジプト軍を苦戦に陥らせたのは、軽戦車の車軸に鉄を使って軽快な動きでエジプト軍の後方に回り込めたからだと言います。製鉄の技術は国家秘密として長年に亘り、独占されていました。周囲が青銅器時代に鉄を独占する優越性は明らかでした。それにしても融点





が 1,535℃もの鉄を学問に依ってではなく、経験によって実用化して行った古代人の智慧には驚かされますね。建築の面でも巨岩に穴を開けて青銅の棒で繋ぎ合わせるなど高度の技術を有していました。

ヌビアから産する金銀をふんだんに使って王を葬送し大建築物を建造したエジプトに対し、ヒッタイトは現実的で実用的な技術を重んじる国家でした。

ラムセス二世と戦ったヒッタイトのムワタリが亡くなると、王位継承問題で内紛を起こしたようで、それが原因でヒッタイト帝国は歴史の中にあっけなく消えて行きました。

前 1350 年頃、アメンホテプ四世が二千年来信仰してきたエジプトの神々を捨てて、太陽神アトンだけを信仰する一神教を国民に強制しました。これは政治的に非常に無理があり、結局 3 代目のツタンカーメン王で古の多神教信仰に復帰しますが、彼ら 3 代の王たちは罰として王名表からも名前を削除され、墓の位置も忘れ去られました。このため、盗掘に遭っていない素晴らしいツタンカーメンの墓が現代の人たちの目に触れることができたのです。

エジプトは前 1100 年頃(3,100 年前) までは古代世界で大きな力を持つ存在でした。

#### この章で参考にした文献：

「古代文明と気候大変動」ブライアン・フェイガン／東郷えりか訳：河出書房新書

「文明の人口史」湯浅赳男／新評論

「ソーシャルパワー(Ⅰ)」マイケル・マン／森本醇・君塚直隆訳：NTT 出版

## 5. ギリシャ文明

ギリシャは自然環境に特別に恵まれていた訳ではありません。土壌は痩せていました。しかし立木が少ないため、伐採は不要だったので、鉄製の犁を使えば効率良く農業が行えました。草木の生えない丘陵地帯と広大な岩肌の海岸線とがギリシャの政治的統合を困難にしています。この地理的制約と、ギリシャ語とギリシャ文化を共有する連帯感が、ギリシャを多数の都市国家(ポリス)群から成るネットワーク国家にしました。

**民主国家アテナイ：**アテナイはギリシャ最大のポリスです。最盛期の領域は 2,500 km<sup>2</sup> 強で、半径 50 km の円と同じ面積です。

前 360 年頃の最大人口は約 25 万人で、その内約 3 万人が成人男子市民、8~10 万人が奴隷でした。民会への平均出席者数は常時 6,000 人を越えており、直接民主制の参加意識の高さを示しています。

前 508 年、政権を取ったクレイステネスは公約を実行し、当時アテナイに住んでいた自由市民全員にあらゆる権利を与えました。彼が民主主義へと続く長い道へアテナイを導いたのです。誰もが評議員や役人や陪審員になることができました。アテナイの人々は、平民の智慧と良識を信頼したのです。

アテナイの人たちは壮麗な建築物を建造する技術と意欲に富んでいました。右はアクロポリス(丘の都市)に残る守護神アテナイを祀るパルテノン神殿です。アテナイは**海洋国家**として成長して行きます。都市としてのアテナイの人口は約 2 万人、その 1/4 に当たる約 5,000 人がエリートである成人市民でした。因みに、現代の都市アテナイには約 185 万人の人々が住んでいます。



アクロポリスのパルテノン神殿 (Wikipedia)

**軍事国家スパルタ：**スパルタは領域的には 8,500 km<sup>2</sup> と大きかったが、同時期の人口は約 25 万人ですが、完全市民権を持つのは約 3,000 人で、部分的な市民権保持者が約 2,000 人ほど加わっています。

前 7 世紀に立法家リュクルゴスが定めた基本ルールに従って、独自の政治制度やライフスタイルを築き、遵守してきました。政府は軍人と地主から成る上流階級により構成されています。二人君主政をとり、相互牽制により独裁に陥らない制度としました。重装備の歩兵部隊から成る常備軍団を置きます。

生粋のスパルタ人は僅か 25,000 人だったのに、被征服民の数はその 20 倍に及んでいます。この一部を政治的権利を持たない自由民とし、他のものを政府所属の農場作業員(農奴)としました。自分たちより遙かに多い被征服民を徹底的に抑圧することが支配者階級のライフスタイルを決定付け、今日、スパルタ式といわれる習慣が出来上がった訳です。

12 歳以上の男子は共同生活に入り、粗末な食事をし、川辺から葦を取ってきてベッドとして寝ました。教育を受け、苦痛に耐える試練を受けます。20 歳になると 15 人の分隊に入り、徹底した軍事訓練でしごかれます。スパルタ兵は勇敢な兵士として名を轟かせています。スパルタは精強な**陸軍国家**として生きる道を選んだのです。文献から、かの有名なギリシャの重装歩兵について、紹介しましょう。

……重装歩兵の成功の秘密は武具にあったのではなく、個々の兵士の力量にあったのでもない。それは長期にわたる訓練を通して習得した集団戦術にあったのだ。若者たちは生涯の 3 年間は、密集方陣戦法の訓練に明け暮れた。訓練において、そして恐らくは実際の戦闘において、楯は集団的施錠装置となっ

た。左腕で構える大きな円形の楯は、自分の左側と、左側にいる仲間兵士の右側を防護した。相互依存が命の綱となった。……この戦術が前提にしていたのは密集方阵戦闘集団に対する高度の忠誠心であり、これこそ台頭しつつあるポリスの社会関係を強化する、巨大な精神力だったのである。密集方阵は奥行きがおよそ8列、左右の中は様々で、100人から1,000人ぐらいまでの兵士で組まれた。……重装歩兵態勢では素早く敵を探し出し、短時間で血みどろの、多くの場合は決定的な遭遇戦に突入した。……縦列の中は僅か1mだったが、これは非常に密である。これによって大きな攻撃力が生まれたのだ。重装歩兵が駆け足で突進してきたとき、ペルシャ人は仰天した（とギリシャ人は言う）。……

（「ソーシャルパワー（I）」 p218~221）

トゥーキュディデスは、この対照的な二つのポリスを対比して、「戦史」の序文にこう書いています。

「もし仮に、ラケダイモン(スパルタ)人のポリスが荒廃に帰し、後に神殿と建造物の礎石だけが残ったのだとすれば、遙か幾世代も後の人々はどう思うであろうか。きっとラケダイモン人の名声について深い疑問を抱くに違いない。……だが、もしアテナイが同じ惨害を被ったとすれば、後世の人はそのポリスの華麗な外観を見て、アテナイの実力を事実の二倍にも誇大視することだろう。この例からも明らかなように、ポリスの外観を実力よりも重視して、徒に疑を挟むことは当を欠いている。……」

**ペルシャとの長い戦い：** やがて、この対照的な政治体制は戦争によって試されます。

エーゲ海の東の小アジア、現在のトルコは、当時、ペルシャ帝国の支配下にありました。ペルシャはメソポタミア文明をシュメル、アッシリア、バビロニアの順で引き継いだ古代文明の正統な継承者です。

この地域の海岸に数百年前からギリシャ人が住み着き、イオニア人と呼ばれていました。前499年、イオニア人がペルシャに対して反乱を起こし、アテナイは20隻の、エレトリアは5隻の軍船を派遣して支援しましたが、陸軍大国ペルシャはこの反乱を鎮圧しました。

その報復として、ペルシャは7年後に2万人の軍隊を乗せた300隻の艦隊を派遣しますが、ギリシャ北部沖で嵐に遭い、遭難して軍事行動は失敗に帰しました。

前490年、ペルシャは再び攻撃してきます。エーゲ海をまっすぐ渡ってエレトリアを落とし、アテナイから約42kmのマラトン湾に向かい、上陸しました。アテナイはスパルタに援軍を求める使者を送る傍ら、隣国プラタイアの小さな援軍と共にマラトン平原に向かい、果敢な戦闘を挑んで、ペルシャ軍を海上へ追い返してしまいました。この勝利を伝える兵士フェイディピデスはアテナイまでを駆け通し、人々に「喜べ、勝った」と伝えて息絶えました。この故事に因んで、今日のマラソン競技(42.195km)があるのです。

10年後、ペルシャ軍は大挙してエーゲ海北岸を行軍し、ギリシャへ南下します。ペルシャ艦隊もその沖合を航行して行きました。ギリシャは都市国家群が連合軍を結成して、これに当たります。連合軍の陸上部隊は東海岸の断崖と海に挟まれたテルモピレーの天嶮でペルシャ軍を阻止しようとします。結局、戦いの3日目にスパルタ軍300名が残って連合軍を逃がし、全員、壮烈な戦死を遂げます。今も残る彼らの墓碑にはこう書いてあります。「旅人よ、スパルタ人に伝えてよ。ここに彼らが掟のままに、果てし我らの眠りてあると」。ペルシャ軍はギリシャのほぼ全域を征服し、アテナイの人々はポリスを離れ、ペルシャ軍がポリスを占領しました。しかし、アテナイの艦隊はペルシャ海軍をアテナイ沖の狭い水道へとおびき寄せ、海峡を見渡す丘の玉座に座って観戦するクセルクセス王の目の前で、ペルシャの軍船を全滅させます。世に名高い**サラミスの海戦**です。海軍が全滅し、物資の補給路も絶たれ、ペルシャ陸軍はギリシャから撤退しました。

再度のペルシャ襲来に備えるために、アテナイは沿岸と島々のポリスとデロス同盟を結成し、アテナイが盟主となりました。暫くすると、アテナイは他の加盟国に相談せずに外交政策を決めるようになりました。最初は防衛のための同盟だったのに、次第にアテナイの帝国へと変貌して行っただけです。この時期、アテナ



イの文学、芸術、音楽、詩、建築物、彫刻など知の活動は最盛期を迎えます。ギリシャ文明が最も光り輝いた時です。これらは民主政のアテナイで「外観は民主政だが、内実はただ一人が支配する国」と言わせた希代の政治家ペリクレス(前 495~429)により成し遂げられたものです。

……アテナイには最大の喜びと飾りをもたらし、他の人々には非常な驚きを与え、いわゆるギリシャの国力と昔の栄華が偽りでなかったことを今でも示している唯一の証拠というべき数多くの神殿の建築は、ペリクレスの政治的業績の中でも(p22)……分量から言っても壮大で、形や美しさから言っても模倣のできない事業が興り、技術家は競って巧妙な仕上げによって自分の仕事に実力以上の力を発揮したが、殊に驚くべきはその速さであった。その一つを取っただけでも、多くの時代や年齢を経てやっと完成に達すると考えていたような仕事全部が、唯一の政策の高潮期に完結をみたのである。……そこでペリクレスの久しきに耐える建造物が僅かな期間で仕上げられたことは一層驚嘆に値する。(p23~24) ……40 年間も第一人者であり続け……将軍の任務は期限が 1 年であるのに 15 年にわたって引き続き一つの支配と権力を保ち、金銭を以て買収されることもなく身を持ち通した。(p29)……軍隊を率いるにあたっては安全を主とすることで名声を得た。(p31)……その後の情勢は、アテナイの人々にペリクレスの人柄を急に意識させ、明らかに追慕させた。生きている時は、自分たちの影を薄くするものとしてその権力の重みに苦しんでいた人々も、居なくなると見ると、急に他の弁論家や民衆扇動家を起用しても、あの人ほど威厳の中に節度があり、温和の中に崇高さのある人柄というものはないということ、改めて認めなければならなかった。前に君主政とか独裁政とか呼んだあの忌まわしい強権も今となって見ると、国政を守る防壁だということが明らかになった。これ程甚だしい腐敗とこれ程多くの弊害が国事を禍していたのを、あの人は無力な弱いものにして押し隠し、増長して手が付けられなくなるのを妨げたのである。(p56)…… (「プルターク英雄伝(第3巻)」ブルータルコス／岩波文庫)

「実際のところ、民主制は最悪の政治形態とすることができる。これまでに試みられてきた、他のあらゆる政治形態を除けば、だが」。(ウインストン・チャーチル) 国家として最も集中力が発揮できるのは独裁制(君主政、独裁官政、共産政等)ですが、過去の歴史では政権の暴走が頻繁に発生して、国民を不幸に陥れている場合が多いようです。民主政は意見の集約に時間が掛かり、また、容易に衆愚政治に墮落するなど問題点は多いのですが、国民が現政権に不満な場合は選挙により政権交代の手段が残されているため、政権の暴走は比較的少ないようです。人類は未だ究極の政治形態は何かの答えを出していません。

さて、ヘロドトス(前 485~420)はペルシャ戦争後、主としてその経過を記録に留める目的で各国を遍歴して自ら現地で聞き込みを行い、「歴史」全 9 巻を著し、「歴史の父」と呼ばれ、後世に大きな影響を与えました。その中では現地の風土や諸事情をも記録しており、ヘロドトスがエジプトで取材した下記の記事は、当時のエジプト人とギリシャ人の神に対する考え方の違いを際立たせています。

……かくして合計は 11,340 年となるが、この間に神が人間の姿をとって現れたことは一度もないという。このことは以前のみならず後のエジプト諸王の場合にもかかってなかったというのである。……(ギリシャの)ヘカタイオスが自分の家系を述べて、16 代目の先祖を神であるといった時、(エジプトの)祭司たちは木造の(祭司長の彫像)数に基づく自分たちの系譜をこれに対比させて、人間が神から生まれたというヘカタイオスの説は認められないといった。ヘカタイオス説の反論として自分たちの系譜をあげたというのはつまり、この巨像の示す一人一人は何れもピローミス(立派な人)であり、……結局 345 体の巨像が何れもピローミスから生まれたピローミスである所以を証示し、その系譜が神にも半神にも遡るものだとはいわなかったのである。…… (「歴史」ヘロドトス／岩波書店：松平千秋訳 p253、p254)

**ペロポネソス戦争**：アテナイの帝国への道は、他のギリシャ諸ポリスの反感と嫉妬を買います。反対の急先鋒であったコリントスがペロポネソス半島諸国と同盟し、スパルタも逡巡の後、これに加わります。遂に前431年、戦争が勃発しました。この戦争については詳しい記録が残されています。アテナイの将軍で、後にアンフィポリスの敗戦（これは哲学者ソクラテスの二度目の従軍で、彼の勇猛振りは敵からも賞賛されています）の責任をとらされて追放されたトゥーキュディデースが「戦史」という名著を残しているのです。彼は序文に極めて近代的な鋭い感覚で次のように書いています。

アテナイ人トゥーキュディデースは、ペロポネソス人(コリントス同盟)とアテナイ人が互いに争った戦の様相を綴った。筆者は開戦劈頭以来、この戦乱が史上特筆に値する大事件に展開することを予測して、直ちに記述を始めた。……（彼は富の蓄積なきところには政治力の結集もなく、支配者と被支配者の関係も希薄である。また、内乱もなく、大きい戦争も起こり得なかった、と鋭い推理力によって過去の神話や伝承の中から、人間の営む物質文明の歩みを着実に掴む記述を多数行う。この事例研究レポートが実に面白い）……また、私の記録からは伝説的な要素が除かれているために、これを読んで面白いと思う人は少ないかもしれない。しかしながら、やがて今後展開する歴史も、人間性の導くところ再び嘗ての如き、つまりそれと相似た過程を辿るのではないかと思う人々が振り返って過去の真相を見凝めようとするとき、私の歴史に価値を認めてくれれば、それで充分であろう。この記述は、今日の読者に媚びて賞を得るためではなく、世々の遺産たるべく綴られた。……（上巻 p55, p75）

……このようにして、内乱は残虐の度を増しつつ荒れ狂った。……この時、生じた如き実例は、人間の性情が変わらない限り、個々の事件の条件の違いに応じて多少の緩急の差や形態の差こそあれ、未来の歴史にも繰り返されるであろう。……こうして次々と諸都市の政情が内乱と化していくと、後から乱に陥るものは先の実例から何を学ぶのか、先よりも遙かに過激な意図や計画を案出し、老獪極まる攻撃手段に対しては非常識も甚だしい復讐手段を以て抗争するのであった。やがては、言葉すら本来それが意味するとされていた対象を改め、それを用いる人の行動に即して別の意味を持つこととなった。例えば無思慮な暴勇が愛国的な勇気と呼ばれるようになり(第二次世界大戦の日本とそっくり同じです)……そして殆どの場合、善行をなして馬鹿と呼ばれるよりも、悪行をなして利口と呼ばれやすい世情となり、人は善人たることを恥じ、悪人たることを自慢した。……だが、一般的に見ると、最後まで生き残った者たちは、権謀術策に劣っていた者たちが多い。その訳は、この者たちは己の足らざるを知り、……警戒を怠らず、行動に向かって果敢に突き進んだからである。……（中巻 p100~103）

（「戦史」トゥーキュディデース／久保正彰訳：岩波文庫）

10年後の前404年、アテナイはペルシャの援助を受けたスパルタに屈し、スパルタ艦隊がアテナイの外港ピレウスに進入し、アテナイの城壁を破壊しました。スパルタはこれでギリシャの最強国になりましたが、援助の代償として小アジアのギリシャ人植民地をペルシャに引き渡し、他の同盟国を弾圧しておよそ30年間に自らの支配下に組み込みました。かつてのアテナイよりも質が悪い盟主となって行ったのです。

アテナイは何故負けたのでしょうか。ここには文明の爛熟期によく見られる市民精神の衰弱・墮落が顕著に現れています。プラトンは「ポリティア(国家)」の中で民主主義が爛熟して悪しき平等主義に堕している現状を次のように書き記しています。

「遵法的な者は隷属的な奴だと罵られ……支配者然と振舞う市民が尊敬される。……父親は次第に息子を恐れるようになり、他方で息子たちは両親を恐れもしなくなり、親たちと同様に振舞うようになる。教師は生徒を恐れ、迎合するようになり、他方、生徒はそういう教師たちを軽視する。……年少者は言葉遣いの上でも、行動においても、年長者と張り合い……老人は若者を恐れ、若者に調子を合わせ、……

冗談を言ったりする。それも高慢な奴だとか、専制的な奴だと言われなかったためである。夫と妻、男と女の間についても同様だ。……」（「民主主義の墮落」勝田吉太郎／Voice2012/11,p166）

アテナイ市民たちは劇場で観劇することを強く愛好していました。ペロポネソス戦争の最中であって、ペリクレス亡き後に続いた典型的なポピュリズム政治家たちは、民衆の観劇費に対する国家補助金の増額要求を無節操に受け入れます。劇場建設費は勿論のこと、演劇に関する一切の費用も国家持ち、後年には遠方から観劇にやって来る旅費まで国家に持たせる始末で、国家予算を策定時に巨額になったこれらのテオリコン費を賄うために軍艦建造費を削っています。こんなことで27年間も続いたペロポネソス戦争に勝てる訳がありません。

しかし、これらの事情は、現在の日本に当て嵌めてみると、健康保険・介護保険・国民年金・生活保護費等の福祉費に対し、選挙目当ての人気取りで歳入に見合わない歳出を行い、将来世代の負債となる国債をGDPの2年分も積み上げている現代の日本の姿と重なっているのに気がつきます。日本ははや末期のアテナイ症候群に侵されているのではないのでしょうか。

**敗戦後のアテナイ：** さて、この敗戦から立ち直ったアテナイはコリントス、テーベ、アルゴスなどと同盟を組み、前371年にはテーベがスパルタと戦い、圧勝します。この頃のスパルタは建国の精神を失って衰退しつつありました。多くのスパルタ兵は収入源であった農場を失い、支配階層としての地位まで失っていました。全く同じ問題がローマでも起こりますから、読み比べてください。「歴史は繰り返す」のです。兵士の数が足りなくなってもスパルタは新しい市民を入隊させずに、解放奴隷やならず者に武器を持たせ、傭兵さえ雇いました。スパルタ人が恐れられ尊敬されてきた**犠牲的精神を忘れ、上から下まで賄賂を受け取る**ようになっていました。ストイック（禁欲主義的）な質実剛健で恐れられ、尊敬もされてきたスパルタ人にして、時代を経るとここまで墮落するのです。

前4世紀のアテナイは依然として商業の中心地であり、有能な人たちが政府の要職につき、数多くの芸術家、作家、教師、哲学者（補遺参照）を輩出しました。

ソクラテスの弟子であったプラトンの関心の中は極めて広く、深く物事を考える人なら一度は思い巡らす問題は全て取り上げたとまでいわれます。彼は理想を追求する人で、良い国家を導くのは「哲人王」だという思想を持っています。一時、プラトンの弟子であったアリストテレスは事実を集め、分析し、分類し、議論する手法を採ります。国家の政治については、中産階級と小地主に実権を握らせるのが良いとの結論に達しています。彼らには政治に費やせる時間があり、強引な変革を好まないからだということです。

経済力を回復したアテナイにまたもやテオリコン費復活の大合唱が沸き起こります。市民の観劇費や体操競技費が年々増加しました。松明（たいまつ）競争の費用が国家財政に重くのしかかったと言います。アテナイの国会に当たる民会は「テオリコン費を削って軍事費に充てよう」と主張する者を「死刑に処す」という決議がなされています。懲りない人々なのです。我々が賞賛して止まないギリシャの演劇や体育競技にも、このような裏面があったのだと知ると、切ない思いがします。

このような平和ボケの衆愚政治を見限って、多くの知識人たちがアテナイから立ち去りました。代表例はアリストテレスです。彼はギリシャの辺境で力をつけて来たマケドニア王に接近し、その子息アレクサンドロスの家庭教師になり、彼に自分の理想の実現を託しました。

前4世紀のギリシャの栄光の時もそろそろ終わりを告げます。戦争技術が進歩し、以前のように農業経営者やビジネスマンが政治家や軍人を兼ねるのが難しくなったのです。精力的に行動する市民こそがポリスの力の源泉でした。そういう人たちがいなくなれば、ポリスも消滅せざるを得ません。



勃興期には各地に進出して植民地を多数建設したギリシャでしたが、国力の衰えは別の所からも来ました。

……アテネの人々は、紀元前6世紀という早い時点で森林破壊への危機感を抱いた。当時、ギリシャの都市人口は急増中で、木材になる森の大半は既に切り倒され、貧乏人たちは山羊が裸にした丘陵地を耕作して、無惨な結果(表土の流出)を招いていた。手遅れになるまで灌漑技術がもたらす破壊に気付かなかったシュメル人と異なり、ギリシャ人は何が起きているかを理解して手を打とうとした。紀元前590年、有力なアテネ貴族たちが引き起こす地方の貧困(貧富の格差)と土地の荒廃が多くの問題の元凶だと見た政治家ソロンは、借金による農奴制と食糧の輸出を禁止しようとする。その一世代後、同じくアテネの支配権を握ったペイシストラストはオリーブの植え付けに補助金を出した。これは段々畑作りと組合せれば効果的な農地再生策になったかも知れないが、今と変わらず、そうした事業に振り向けられる資金と政治的意志は課題の大きさに及ばなかった。……

(「暴走する文明」p106)

……ギリシャは出産の停頓や町から人が消えるなどの人間不足に苦しんでいる。今日の人々は奢侈や金銭が好きだが、おまけに怠け者であり、結婚を嫌っている。既婚者の場合は家族を養うのを嫌っている。せいぜい彼らが受け入れることは一人か二人の子供を持って、彼らに財産を残し、贅沢に暮らせる様にすることである。……

(「世界史」38-4/ポリュビオス(前203~120):「文明の人口史」p103)

**マケドニアの勃興：**マケドニア王フィリッポスが傭兵とマケドニア人とを編成・訓練し、彼らを意のままに駆使すると共に、彼らに戦利品を与えて報い、ギリシャ上層階級同盟に加わった時の彼の王国は支配帝国の様相を呈していました。ギリシャ都市国家群へのマケドニアの圧力は、前338年、カイロネイアでのマケドニアの全面勝利によって終わりました。フィリッポスは都市国家群をコリントス同盟へと編成した後、アジアへと進軍しました。

前336年の彼の突然の死(観劇中の暗殺)も、マケドニア帝国主義を一瞬止めただけでした。

彼の息子がアレクサンドロス3世だったからです。

アレクサンドロスは哲学者アリストテレスを家庭教師として英才教育を受け、16歳にして父の遠征中のマケドニアを治め、18歳で騎兵隊を率いて父のギリシャ征服に一役買いました。父の暗殺後、20歳にして即位し、直ちにマケドニア軍を掌握し、好機と見て反乱したギリシャのポリスを手際よく制圧します。

ギリシャの諸都市は二度と再び完全自立国家には戻れませんでした。以後一千年以上にわたって、彼らは単に地方自治体に過ぎず、支配帝国の保護下に置かれたのです。

**アレクサンドロスの東征：**前334年、アレクサンドロス22歳の時、フィリッポスが既に路線を引いていたアジア遠征を敢行します。約35,000の兵を率いて30日分の食糧を運び、ヨーロッパからダーダネルス海峡を渡ってアジアに侵入します。彼の軍は重装歩兵が密集して長槍を連ねる密集方陣(ファランクス)編成です。これに機動部隊である騎兵がつきます。

最初のグラニスコ河畔の会戦に軽く勝利し、メソポタミア地方へ向かいました。イッソスでペルシャの主力部隊と会戦します。ペルシャ側は公称60万人、しかし、実際はペルシャは全部軍人を集めても10万人程度で、残りは寄せ集めの傭兵です。アレクサンドロスは自ら敵陣へ突っ込み、ダレイオス3世に肉薄し、ダレイオス3世は戦車の向きを翻して逃げ出し、勝負は決まりました。ダレイオス3世は自分の母親、妃、姫まで置き去りにして逃げ、アレクサンドロスは彼女らを丁重に保護しています。

次にアレクサンドロスは西に進路を変え、フェニキアの都市ティルスを攻略し、7ヶ月掛けて陥落させました。ギリシャの海上貿易の競争手を退治したのです。ここから資産と共に避難した人たちが、後にローマを苦しめるカルタゴ(現在のチュニジア)を創設します。

次いでアレクサンドロスはエジプトに向かいますが、ここは予めペルシャの支配の圧力を受けていたため、むしろ解放者として歓迎されました。

前 332 年、彼はエジプトにアレクサンドリアという都市を建設します。ここは古代では稀な 100 万人都市へと発展し、70 万冊の蔵書で有名な図書館がおかれしました。641 年にイスラム世界に組み入れられてからも、アラビア科学の発祥の地となり、後に西欧のルネッサンス時代に、ギリシャに発し、イスラムで育った科学がヨーロッパに里帰りし、今日の科学技術の全盛時代へと展開して行く運命の中継点になりました。

前 331 年、アルベラでダレイオス 3 世との最後の決戦になります。ペルシャ側は公称 100 万人(後世の研究では、実質の戦士は 10 万人程度)、これに約 4 万人のアレクサンドロスの軍は突入し、またもやダレイオス 3 世は逃げだし、ペルシャ軍は総崩れとなりました。逃げたダレイオス 3 世は地方提督(サトラップ)に裏切られて殺され、ペルシャ帝国は滅亡しました。

戦いは兵士の数が多いというだけでは勝てません。**戦力を集中させて、迅速に行動し、相手の中核部を叩く**ことが要点なのです。中核部がやられると、他の部分は立ち直れずに総崩れとなります。その点で、アレクサンドロスは戦争の天才でした。

また、彼はこれから進む地勢、道路状況、補給の可能性、その防備能力の情報が届くまでは、決して補給基地から動きませんでした。彼は戦争におけるロジスティックス(物流)の重要性をよく理解していたのです。そして、戦わずして威圧により防衛軍に城門を開けさせたケースの方が多いのです。彼は知謀の人であって、決して蛮勇の人ではありませんでした。

米国と日本が戦った太平洋戦争で、日本の指導者たちがアレクサンドロス大王の様な理性的な人たちであれば、あのような物流が全く伴っていない、精神力だけで勝てると思い込むような愚かしい戦争指導はしなかったことでしょう。死亡した兵士の約 6 割が餓死なのです。時代こそ現代ですが、当時の日本の指導者たちの思考力はアレクサンドロスより遙かに原始人に近かったと言わなければならないのは残念です。

「戦争に負けたら、その民族が精神的に立ち直るには 100 年間はかかる」というのが人類の歴史の教訓です。1945 年の敗戦から約 70 年が経ちました。途中、1980 年代後半に日本が経済的に勃興し、「(米国、ソ連の)冷戦は終わった。勝ったのは日本だ」といわれた時期もありました。だが、世界が新しい情勢に合わせて自己改革を行っているのに、日本は一時の勝ちに胡座(あぐら)をかいて改革の努力を怠り、1990 年代の「失われた 20 年」で精神的に復興できていないことを世界に曝露しました。あなた方の世代で、日本は先の敗戦の呪縛から自由になって欲しいと思います。

アレクサンドロスは旧ペルシャ領を支配下に収めましたが、彼の征服欲はまだ満たされることがありませんでした。なお転戦を重ねて、前 326 年にはインダス河を渡り、インドへ侵入します。ここで既に 8 年間も故郷を離れて転戦してきた兵士たちは前途に不安を覚え、ストライキに入ります。

さすがのアレクサンドロスも折れて遂にこれ以上の東征を断念し、西へ戻って、ペルシャ帝国の後継者としてバビロンから支配地を統治することにしました。

**ヘレニズム諸国の誕生：**アレクサンドロスはギリシャとペルシャの文明の融合を図り、民族の融合を図りました。彼は「**普遍帝国**」(民族・文化・宗教の違いを包摂した政体)の樹立を夢見たのです。

この夢は、ギリシャ文明の後継者である、次のローマ帝国で実現されます。

彼は自らもペルシャの貴族の娘を娶り、1 万人のギリシャ兵士とペルシャ女性とを集団結婚させました。彼らは現地民に同化して行きますが、これを機にギリシャ文化(**ヘレニズム文化**)がオリエントに深く浸透し、**ギリシャ語が共通語**になります。

中東発祥の宗教であるキリスト教の聖書が、初版から全てギリシャ語で書かれているのはそのためです。

アレクサンドロスは33歳の働き盛りで病に斃れます。身体の酷使と飲酒による体力低下が原因のようです。後継者について聞かれ、「最も王たるに相応(ふさわ)しい者に」と言い残しますが、これは何とでも解釈できる揉め事の元になる言葉です。

結局、将軍たちの勢力争いになり、落ち着いたときはアレクサンドロスの帝国は三つの国に分かれました。

マケドニア、ギリシャをアンティゴノス朝マケドニアが、旧ペルシャ領をセレウコス朝シリアが、エジプトをプトレマイオス朝エジプトが治めることになります。

前255年にはシリアから中央アジアでギリシャ人提督によりバクトリア国が独立し、前248年にはシリアから現在のイランでペルシャ人によりパルティア国が独立します。前30年にエジプト女王クレオパトラのプトレマイオス朝が滅亡するまでの約300年間を**ヘレニズム時代**と呼び、アレクサンドロスの帝国の流れを汲む国を**ヘレニズム諸国**と呼びます。

この章で参考にした文献：

「ソーシャルパワー(Ⅰ)」マイケル・マン／森本醇・君塚直隆訳：NTT出版

「人間ものがたり」ジェイムズC.ディヴィス／布施由紀子訳：NHK出版

「暴走する文明」ロナルド・ライト／星川淳訳：NHK出版

## 6. ローマによる平和 Pax Romana

「人類史の全てがここに凝縮されてある」(ゲーテ)といわれます。「人間とは、どういう状況で、どういうことを考え、どういうことをやる生き物なのか」「人間はどこまで高貴になれ、或いは墮落できるか」を知るには、ローマ史を見れば全て書いてあるという意味です。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」ともいいます。私は若い頃は科学技術に深い関心を持ち、それ以外には無関心でしたが、40歳頃に小田急・中央線での1時間の通勤時間を無駄にしたくなくて車中で歴史書を読み始めました。学生時代には何の関心も持てなかった歴史書の面白いこと、すっかり嵌り込んでしまいました。司馬遷の「史書」も全巻読みましたが、何故か中国の歴史は人間の裏表が有り過ぎ、騙し・裏切りが多くて好きになれませんでした(それが好きな人たちもいます)が、西欧の歴史書は人物像が明快で、古代から中世までかなりの範囲読み漁りました。

ローマ史に関してはギボンの「ローマ帝国衰亡史」全10巻を読んでいます。その一部を紹介しましょう。

ローマ帝国は、クリスト紀元第二世紀には、地球の最善美の部分と人類の最開化の部分を含んでいた。広大な帝国の辺境は昔ながらの武名と規律ある勇氣とによって防護されていた。穏和な、しかも強大な制度と風俗の勢力は、つとに駸々として諸属邦の統一を強靱ならしめていた。属領地の穏順な人民は富裕と贅沢の恩恵に浴し、しかもこれを濫用した。……(一巻 p31)

……ローマ人は実習訓練に欠けた不完全な猪勇を非常に嫌った。……軍隊の冬期駐屯地には、彼らの大事な教練が極めて変わりやすい天候のために妨げられないように、巨大な教練場が建設された。そして模擬戦に使用する武器は、実戦に要するものの二倍の重量を持たせることを入念に遵行した。……兵士らが教え込まれたことは、行軍・走馳・跳躍・水泳・重荷の担運、攻防両種の戦闘あるいは遠隔戦や接戦に使用されるあらゆる種類の武器の操作・種々の展開教練および笛声に合わせて動作するピルリック舞踏等であった。ローマの軍隊は平和の最中であって戦時教練に親しみ慣れていた。……(一巻 p42)

……外国の血を混入しないで古来の市民の純血を維持せんとする狭隘な政策は、アテナイやスパルタの繁栄を阻害し、その廃滅を早からしめた。ローマの向上的精神は野心のために虚栄心を犠牲にした。そして例え奴隷や外国人の間にせよ、あるいは敵や野蛮人の間にもせよ、見出される限りのところで自国のための英才俊傑を採用するのが、公明正大であると共に賢明であると思われた。……(一巻 p68)

……平民らは窮余の策として家屋を空中に非常に高く建て上げるようになった。しかし、それらの高い建築物は多くは拙速の工事と粗末な材料とで構成されたので、頻々としかも重大な事故を起こした。そこでアウグスツスによってもネロによっても度々繰り返して建築制限令が發布され、ローマの城壁内においては、民家は地上70フィートを越えてはならなかった。(三) ユヴェナリスは彼自身の体験かららしく貧民階級の住居難を憂え、ローマで暗い惨めな部屋のために年々払うだけの金額があれば、イタリアの他の小都市では小綺麗な住み心地の良い家屋を買うことができるから、一刻も躊躇せず直ぐにこの首都の煤煙から脱れて他市へ移住せよと貧民らに勧めている。……(五巻 p40)

(「ローマ帝国衰亡史」ギボン Edward Gibbon, The History of the Decline and Fall of the Roman Empire(1776-88)/岩波文庫:村山勇三訳)

1788年に完成した力作ですが、ギボンの英文は「格調は高いが、悪文だ」と評判なのです。おまけに日本語訳が古いため読みにくい二重苦です。ローマの最盛期から没落までの約1,200年間を記述しています。これからローマ史を読むなら、2006年、塩野七生氏によって上梓された「ローマ人の物語」全15巻を勧めます。日本語で書かれているというだけでなく、恐らく世界で最善のローマ史の書物です。ローマの建国から書き出している点、ギボンの本より時代の範囲が広いのも嬉しい点です。

ローマは歴史全体を通じて最も成功した征服国家の一つであり、また、征服したものを最もうまく維持した国家です。その帝国は民族、文化、宗教の違いを認めた上で、それらを全て包み込む「普遍帝国」であり、



それを数百年の長きにわたって維持できたのはローマ人の凄さです。

今、もし、ローマ帝国のような普遍帝国が存在すれば、イスラエルとパレスチナは現在のような対立関係にはなく、単に隣り合った地域として互いに平和に暮らしていることでしょう。共通貨幣が通用し、お互いの関税もなく、人の行き来も自由なはずです。

歴史を通して見れば、国家の形態が現在のように民族国家になり、国家間の紛争が多発するようになったのは日が浅いことです。EUに見るように、グローバル化した世界経済は新しい国家像を求めて動いています。数百年にわたって民族間対立もなく、宗教的対立もない普遍国家を造り、維持し、**ローマの平和 Pax Romana** と呼ばれる人類史上の理想郷を実現したローマとはどのような国家であったか、その建国から振り返りましょう。

## 6・1 王政のローマ

**ローマの建国**：前 753 年、首領ロムルス(当時 18 歳)を王として、ラテン人の食い詰め者約 3,000 人が、それまでは価値がない土地として住む人としていなかったテヴェレ川下流域のローマの地に住み着き、建国しました。ロムルスは王、元老院(当時の議員数 100 人)、市民集会の三本柱で国政を運営する制度を定めました。現代の民主政治では、国家権力を司法・立法・行政の三権分立で相互牽制して権力の暴走を防いでいますが、それと似ています。

初期のローマは右図のように七つの丘と谷間に当たる湿地帯で構成されています。この丘が低く互いに接近しているために、守備上有利でないのが、それまで誰も利用しなかった理由でしょう。

**サビーニの娘たちの強奪事件**：ローマが最初に行った事業が、近隣のサビーニ族を祭りに招待することでした。当時のラテン地方では、祭りの時期には戦争を行わないという掟がありました。サビーニ族は何の警戒もせず、新しくできたローマの町に一族挙げて訪問します。祭りも酣(たけなわ)になり、サビーニたちが油断しきっている時に、ロムルスの命令一下、ローマの若者たちがサビーニの若い女性たちに襲いかかり、彼女たちを抱き抱えて無理矢理に連れ去ります。前代未聞の暴挙に、サビーニ族の男たちは残りの家族を守って自分たちの集落に戻るしかありませんでした。サビーニは娘たちの返還を要求しますが、ロムルスは「サビーニの娘たちはローマの男たちの妻になる」との回答を寄こし、略奪された女性と自分自身がさっさと結婚式を挙げてしまいました。（「痛快！ローマ学」／集英社インターナショナル p29）サビーニはローマに宣戦布告し、都合 4 回戦いますが、ローマ優勢でした。4 回目の戦いの時、掠われた娘たちが間に割って入り、「どうか戦うのを止めてくれ」と双方に懇願しました。両者の抗争は終結します。

欧米の結婚式で花婿が花嫁を抱き抱え、新居の敷居をまたぐ習慣はこの略奪結婚が起源になっています。

この和平協定に当たって、ロムルスは「両部族の合同」を提案し、クィリナーレの丘をサビーニ族の居住地として明け渡します。そして王位をサビーニ王のタティウスと分け合い、共同統治体制に入ります。市民権も、元老院の議席も全く対等に与えました。

ロムルスとすれば、建国直後の脆弱な国力を対等合併によって強化する政策でしたが、結果的にこれは大成功でした。その後も、ローマは戦った相手を自らの仲間に加える政策を採り続け、このユニークな政策の



お蔭でローマは勢力を増して行きます。800年後のギリシャの歴史家プルタルコス是这样書いています。「敗者さえも自分たちに同化させるこのやり方くらい、ローマ(帝国)の強大化に寄与したことはない」と。

37年間のロムルス(ルムルス)の治世が終わり、3代目の王トゥリウス・オスティアリウスはラテン人発祥の地、ローマ人にとっては先祖の地でもあるアルバロンガの征服に成功します。

これによってローマは「ラテン人の本家」の地位を得る訳ですが、この時も彼らはアルバロンガの民をローマに移住させ、市民権、元老院議員を与えます。この時に移住し、元老院議員になった有力家門の一つに「ユリウス家」があり、その子孫にユリウス・カエサルがいます。

ローマ人は帝政末期になるまで、傭兵を使うことをしませんでした。「**自国の防衛は自分たちで行うべきものであって、他人に任せるべきでない**」という哲学を堅持しました。ローマ市民は軍役に就いて始めて一人前の市民だと考えられていました。軍役は一種の「直接税」であり「血の税金」とも呼ばれています。

そして、財産が大きければ大きいほど、軍務の負担も重くなり、多くの兵数を提供するシステムになっていました。

……我々が使っている「階級」という言葉はローマのクラシス *classis* から来ていて、これは富に応じた軍事奉仕義務の等級のことである。後のローマ人は、この制度を作ったのはセルウィウス・トゥリウス(6代目の王)だとした。……最も富裕な階級(結局それは騎士身分だったが)は騎兵の百人隊(ケントゥリア)を18隊提供し、次に富裕な階級は重装歩兵の百人隊を80隊、次なる階級は鎖かたびら或いは楯なしの歩兵百人隊を20隊、次はすね当てなしを20隊、次は槍と投げ槍だけの装備で20隊、次は石投げ器を持つ30隊、という等級だった。これらの階級は「アッシドゥイ *assidui*(納税義務ある市民)」と呼ばれて、文字通り国家の財政を支援していた。その下が国家に対してできるのはプロレス(子供)だけという「プロレタリア *proletarii*(無産階級)」で、軍事奉仕義務なしで名目上の百人隊1隊を組織していた。各百人隊は最重要な民会「コムティア・ケントゥリアタ(百人隊民会)」で平等な投票権を持っていた。この制度は市民権に財産によって比重を付けているのだが、男性ならば誰からも、無産階級からも投票権を奪っていなかった。……  
(「ソーシャルパワー(I)」 p274)

6代目の王までは、その事績を見ればローマ市民は正しい選択をしてきたと思います。

7代目の王タルクィニウスは軍事的には有能な王なのですが、本人は先王が暗殺された結果として民会の承認を得ずに王位を得、息子は有力者の妻を手籠めして自殺させるという人倫にもとる行為があり、前509年、ブルータス(カエサルを暗殺する同名の人物との血族関係はない)の主導で蜂起した市民軍により追放されます。224年間、7代続いた王政は終わりを告げました。

## 6・2 共和制のローマ Republic of Roma

**元老院による集団指導体制**：ブルータスは二度と権力の暴走が起こらないように、最高指導者である執政官 *Consul* を「市民集会によって二人選ばれ、任期は1年とする」「各執政官は拒否権を有する」「再選は妨げない」と定めます。

また、元老院の機能強化を図り、議員定数(当時200名)を300名に増員し、ローマの新興勢力に属する有力家門の家長を多く選びました。議員の身分は世襲ではないが終身制で、人気取りに汲々とする必要がなく、長期国政に携われれば長い目で問題が見えてくる利点があります。これで当時のローマの有力者は殆ど議員として網羅されました。それ以後、元老院での演説の冒頭には必ず「*Patres Conscripti*(建国の父たちよ、新しく加わった者たちよ)」と述べる習慣になりました。元老院議員は戦争で先頭に立って戦うことが多かったため、戦死者も多く、絶えずメンバーの新陳代謝がありました。

ローマは王政による独裁体制を改めて、元老院を中心とする集団指導体制へと転換したのです。この政体は「寡頭政治」と呼ばれるものです。

意外なことに元老院議員にならない限り、国政への発言権がないこの体制に若者たちが反撥します。以前であれば、王に拔擢されれば立身出世のチャンスがあった道を閉ざされたと感じたのです。一部の彼らは、追放されたタルクィニウスを呼び戻し、王政復古を図りますが、露見して市民集会で裁判が開かれ、彼らは国家反逆罪に問われます。その中に、ブルータスの息子二人が含まれていました。ローマの法律には「民法」と「私法」があり、「私法」により家長は子供の生殺与奪さえ含む強力な家長権を与えられています。彼は二人の息子に3度有罪か否かを問い、彼らが3度答えなかったため死刑を宣告し、その場で刑が執行されるのを見届けてから立ち去ったと史書は伝えます。

タルクィニウスは出身地エトルリアの王ボルセンナを焚き付けてローマと戦わせ、ブルータスは相手の王の長男と差し違えて戦死、ローマは包囲され糧道を絶たれますが、ローマ軍は不屈の精神で戦い抜きます。

この戦いの無益を悟ったエトルリアから和平の申し出があり、戦争は終結しました。この戦いは実質的には負け戦であり、エトルリア内のローマ領はことごとく返還させられます。

強大な都市であったローマはラテン連盟の覇権を放棄して小国に墜ち、その勢力を回復するのに1世紀を要しました。「左腕のムティウス」「橋の上のホラティウス」など、**負け戦を美化する武勇伝**に事欠きません。連戦連勝のカエサル回想録には武勇伝はありません(要りません)。

**格差の拡大と平民の不満：** この戦いが終わった後の平民の状態は最悪でした。勝ち戦であれば、出陣中の無収入を、戦利品により補って余りあります。ところが当てが外れて、負け戦になってしまったのです。

地所は敵に取られ、戦場に出ている間に家族を養うための借金は嵩んでいました。ローマの兵役制度は直接税だと説明しましたが、この税金は裕福な貴族や騎士には大した負担ではありませんが、家業を中断して兵士になる平民にはその期間は収入の喪失という耐え難い負担となります。借金の返済ができなくなって奴隷のような境遇(債務奴隷)に墜ちる人も出ました。市民集会でも貴族が平民たちより多くの投票権を持っており、平民の声が国政に届きにくい構造になっていました。ローマの政体では貴族と騎士たちだけが人民で、平民は問題にされていません。

……第一に、戦争は市民義勇軍を崩壊させた。……イタリアでは軍事奉仕義務と実際の戦闘によって多くの小農民が疲弊し、借財へと追い込まれた。彼らの土地は大地主の手に渡り、農民はローマへと移住した(プロレタリアになる)。……軍隊では差異が広がった。紀元前200年頃、百人隊の隊長は普通の兵士の2倍の戦利品を手にしたが、紀元後1世紀のポンペイウスの頃には20倍、上級将校ともなれば500倍を得ていた。普段の俸給格差も広がり、共和制時代の終わりの百人隊隊長は兵士の5倍を受け取り、アウグストゥスの治世になるとそれが16~60倍にも達したのである。……

(「ソーシャルパワー(I)」p277~278)

「……持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。……」。この節(マタイによる福音書13章12節)は貧富の二極分化を説明する用語として、経済学では「**マタイ効果**」と呼ばれています。米国では企業のトップがお手盛りで何千万ドルという報酬を手にする一方で、健康保険にすら入れず、熱心に働いても生活が成り立たないワーキングプアと呼ばれる人々が増えています。日本にも似た状態が発生しつつあります。どのような過程でそれらの事柄が生起するのか、それではどうすれば良いのか、ローマ史の中にそのヒントがあります。

共和制ローマの最初の1世紀は人民の概念を拡大しようとする人々と、それを血統と富の限界に止めておこうとする人々の間の社会闘争の歴史です。戦後の前494年、平民たちは借金棒引き、土地の再配分、執政官選出権を求めて街頭・広場に出て騒ぎ始めます。上流階級が誰もこの要求に耳を貸さないで、平民は5km

離れたモンテ・サクロに籠もり、ストライキに入ります。丁度、この頃、アペニン山脈の向こうから蛮族のエクイー人、ヴォルスキー人が降りてきて、ラテン同盟の諸都市を席卷します。何度使者を派遣しても交渉ならず、遂に元老院は譲歩して、借金はい棒引き、債務奴隷は解放、毎年平民から二人の護民官(トリブヌス)と三人の造営官を選出することになりました。やっぱり、文句を言うべき時は文句を言わなければいけません。

**独裁官制度の誕生：** 平民の復帰で祖国防衛が可能になり、戦争は60年間続きましたが、今度は同盟諸国もローマに忠誠を守ります。この中で超保守派の将軍を護民官が追放し、敵に寝返ったその将軍が攻め込んで連戦連勝する事件もありました。まさに何でもありがローマ史の面白さです。

ローマとラテン同盟の連絡も絶ち切られた難局を乗り切るために、危機の乗り切り策として二人の執政官が指名する独裁官(ディクタール)制度を導入し、前431年、キンキナートゥスが(2度目の)指名されます。彼の指揮の宜しきを得て、ローマ軍は僅か15日間で敵を敗退させ、彼は任期5ヶ月を残して独裁官の官位を返上し、再び普段通りの農作業に戻りました。彼の清々(すがすが)しい出所進退は、この時代のローマ人に彼のような清貧を尊ぶ精神を焼き付けます。このようなノーブレス・オブリージュ(Noblesse oblig  (仏語)高貴な者の義務)の権化のような貴族がいるので、平民と貴族の対立が決定的なところまで行かなかったのでしょう。

アメリカ独立戦争が終結して、ワシントン等の戦争指導者が集まって祝賀会を開催し、その席で「勝った戦争の指導者であるこの立場を利用して権力を求めることなく、また、以前と同じ市井(しせい)の生活に戻ろう」と誓い合い、キンキナートゥスの遺徳を偲んで、その町を英語読みのCincinnatiと命名しました。

**パトローネス／クリエンティスの堅い結び付き：** 地縁、血縁や大きな恩義を被ったことで発生する保護者・被保護者関係とでもいうべきもので、貴族であるパトローネスは平民であるクリエンティスの就職、結婚、訴訟、借金などのあらゆる相談を受け、その解決に力を貸す義務がありました。クリエンティスはパトローネスが公職に立候補すると彼に投票する、戦争での兵役提供義務に際して兵士になってくれるという関係でした。しかもこの関係は「信義」に基づいており、相手が落ち目になってもどこまでもついて行くというのがローマ人の考え方でした。このことは「十二表法」という憲法のような法律にも書いてあります。このような関係も貴族と平民の対立の緩和に役立っていました。

カエサルがルビコン川を渡る前日、最も信頼する副官ラビエンヌスは敵のポンペイウスのクリエンティスであり、ポンペイウスの説得の手紙を受けて戦陣を離脱します。カエサルはそれを咎めることをせず、残した荷物と給料を後で彼に届けさせています。

**ガリア(ケルト人)の襲撃：** ローマは外敵侵略中に同盟国でありながら、謀反行為を重ねたエトルリアのウェイの懲罰戦に臨みました。これが意外な苦戦となり、前387年、カルミスを独裁官として選びます。彼はこれまでは無給で軍務に服し、故郷では家族が飢えていた兵士たちに、始めて給与制度を導入して後顧の憂いを取り去りました。

兵士たちは発奮し、一挙にウェイを攻め落とし、全住民を奴隷としてローマに届けます。

ここで貴族と平民の抗争が再燃しました。平民たちは立派な町並みのウェイをローマの第二の首都にしようと提案しました。「貴族が巾を利かせるローマは嫌だから、ウェイに我々を移住させてくれ」という意図です。エトルリア諸都市を次々と陥落させていたカルミスが、この提案の反対の急先鋒になりました。平民たちはウェイの戦利金をカルミスが私したとして告発し、カルミスは独裁官を辞任、アルディアに亡命します。平民たちは続々とウェイに移住し、ローマの人口は半減しました。

ここにフランスから勇猛で知られるガリア人(ケルト人)が攻め込みます。これまでガリア人はエトルリアの防衛網を突破できずにいたのを、ローマが取っ払ってくれた訳です。前390年、ガリア人は続々南下を始め、ローマは包囲され、7ヶ月の籠城の後、300kgの金を差し出してガリア人に引き揚げてもらいました。



**リキニウス法の制定・元老院の開放・調和の神殿の建立：** ローマはカルミスを呼び戻し、彼が中心になって防衛体制の再建をなし、周辺部族と戦い、再び彼らを同盟国にして行きます。彼は常勝將軍で、ロムルスに次ぐ「第二のローマ建国者」といわれました。

ローマ人は1世紀に及んだ貴族と平民の抗争こそがローマを廃墟にした真の原因だと正しく理解しました。前367年、平民出身のリキニウスによって提案され、貴族たちも賛成票を入れたリキニウス法が制定されました。重要な項目は①二名の執政官の内、一名は平民とする、②何人も500ユゲラ以上の土地を所有してはならない、③債務の支払い済み利息は元本から差し引き、残額を3年間の分割払いで返済する、です。

当時、何が問題だったかよく判るでしょう。

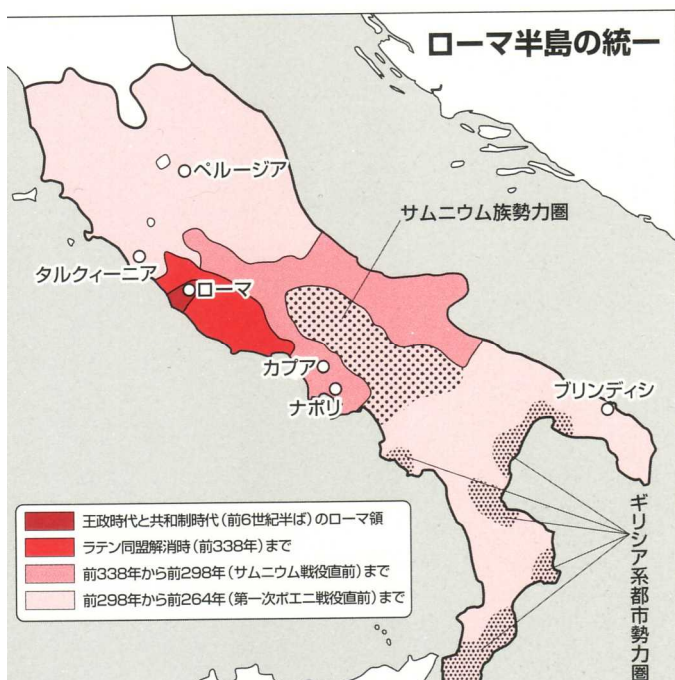
数年後、平民でも公職(護民官等)に就いた経験有る者は元老院議員となるとの改革が実行されます。

そしてローマの中心地「フォロ・ロマーノ」に「コンコルディア神殿」が建立されます。ここに祀られている神は「調和・一致」という概念なのです。長年、国を二分させてきた貴族と平民の対立を今後は解消し、両者が協調してローマのために尽くすのだという精神がここに確立し、ローマは力を取り戻しました。

**ローマ連合の構築：** ガリア・ショックでローマが学んだのは、同じラテン部族の血を引く仲間同士の同盟であっても、同盟関係を支えるのは友情や信義ではなく、力なのだという現実です。

「リキニウス法」制定から30年間、ローマは新しい同盟関係の構築に入ります。これが20世紀のトインビーをして「政治建築の傑作」といわせたローマ連合の始まりでした。これは「外交交渉によって同盟関係を築くのではなく、まず戦争に勝ってから彼らを同盟に加える」との方策をローマは採りました。

ローマ同盟国を再征服して彼らに兵役の義務とセットになった完全な形での市民権を与えました。ローマ連合ができてから戦った後に同盟国となったサムニウム族やギリシャ系都市国家は「ソーチ」と呼ばれ、「ローマ連合が戦争する時に兵力を提供する」以外の条件を付けず、更にソーチの有力者たちにローマ市民権を取得することを勧めました。その場合も自国の国籍を捨てる必要がなく、二重国籍になるのですが、ローマはそのことを全く気にしていません。



(「痛快！ローマ学」／集英社インターナショナル p81)

**コロニアとローマ街道：** 同盟国の離反を防ぐため、戦略上重要だと考える場所に、要石としてローマ人が暮らし、防衛する町を開拓しました。これがコロニア(植民都市)です。ドイツのケルンはコロニアが訛った地名ですが、コロニアには今でも大都会になっている所が多く、ローマ人の地政学的見方の正しさを証明しています。

コロニアにローマ人はローマ文明を持ち込みます。大浴場、コロセウム、図書館、上下水道網など、ローマの先進文明の浸透・普及は地域住民に好感度で大歓迎されました。これらのソフトパワーもローマの覇権確立に非常に役立ちました。終戦後に米国文化が好感度で日本に受け入れられた関係とよく似ています。

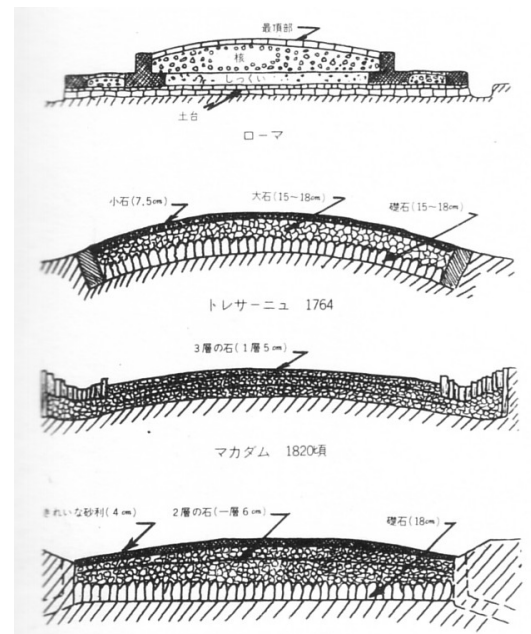
「全ての道はローマに通ず」(ラ・フォンテーヌ)で有名なローマ街道は、前312年、山岳のサムニウム族との戦争の最中にローマの財務官アッピウスの立案・監督で作られ、今も残るアッピア街道を嚆矢とします。この時代、ローマは自分が制覇した国との同化政策を大事にして、心理的に威圧感を与える駐留軍を置かず、

軍の駐屯地はローマにしか置かない体制を取ります。その代わり、一旦急あれば整備された街道を迅速に進軍して現地に赴くシステムを作ったのです。軍用道路ですから、待ち伏せの兵を隠せる街道の樹木は1本も植えさせません。

ローマ街道の構造は右図の最上部の図で、石畳で排水溝があり、車道と歩道が区別されています。

最終的に帝政時代にはローマ国内に張り巡らされた街道は、主要幹線が375本、総延長8万km、砂利舗装の支線を入れると15万kmに及びました。この街道は平時は文化や物資の交流の道としても有効に利用され、帝国内の文化活動や経済活動が活発になります。

この道は両刃の剣で、敵に攻め込まれる時にも使われます。中国はこれを嫌って道を整備せず、防壁を各地に設ける政策を採りました。一方、ローマは街道の利便性と経済効果のメリットを重視して作り続けました。



(「発明とアイディアの歴史」講談社 p19)

**ポエニ戦役：** イタリア半島の長靴の爪先3kmの海峡を隔ててシチリア島があります。ローマがイタリア統一を成し遂げた丁度その頃、かねてシチリア島の西半分を支配していた地中海の王者カルタゴが東にも勢力を伸ばそうとして侵攻したギリシャ系メッシーニからの救援要請に、ローマの新興事業家たちがビジネスチャンス进行期待し、躊躇する元老院を煽って開戦したのが130年にわたり続いたポエニ戦役の始まりです。カルタゴは中東のセム族であるフェニキア人の植民地でした。アレクサンドロスが前333年にティルスを攻略した時、富豪たちはその富をカルタゴに避難させました。この資金が発展の原資となってカルタゴは地中海の制海権を抑え、海洋国家として覇を唱える大国となっていました。人口20～30万人、平民は12階建てのアパートに住んでいました。港には220の突堤があり、500隻の巨艦5段櫓船を擁しています。

**第1次ポエニ戦役（前264～前241）：** カルタゴは海上からローマの補給基地を急襲、海軍を持たないローマは大急ぎでカルタゴの軍艦をコピーして120隻の軍艦を建造して戦います。

カルタゴは130隻の軍艦で対しますが、ローマは長い鉄の鉤を相手の船に打ち下ろして引き寄せて船を接舷させ、敵船に乗り込んできて陸戦のように戦い、カルタゴは三分の一の船を失って敗走します。

勢いを駆ったローマ軍はアフリカ大陸に上陸してチュニス付近でスパルタ人クサンティッポスが騎兵と象を使った新戦術で指揮するカルタゴ軍と決戦し、ローマ軍は壊滅し、執政官レグルスは捕虜になります。

カルタゴも反撃に出ますが、パレルモの奪回で大失敗し、2万人の兵を失います。

その後、ハミルカス將軍の沿岸攪乱戦術が効を奏し、ローマは必死で200隻の軍艦を建造し、400隻のカルタゴ軍艦と対戦します。積荷の重さに行動の自由を欠いたカルタゴ海軍は120隻を失い、敗走します。

結局、カルタゴはローマにシチリア放棄、捕虜の返還、巨額の賠償金を支払って終戦になります。この大量の軍艦建造でさしものレバノン杉も根こそぎ伐採され、今日では少数が天然記念物になって残っているだけです。古代の大規模環境破壊でありました。

**第2次ポエニ戦役（前218～前204）：** ハミルカル將軍は与えられた1個師団でスペイン植民地の平定・経営で力を養い、その父亡き後を26歳のハンニバルが嗣ぎ、第2次ポエニ戦争が勃発します。

象30頭、歩兵5万人、騎兵9千人を連れて前進、苦難の末アルプスを越え、軍勢26,000でイタリアの平地になだれ込みます。アルプス越えの前に、帰国を願った怯懦な1万人を穏やかに離隊させています。

その地のガリア人はハンニバル軍を歓迎、糧食を提供し、同盟軍となってローマ駐屯軍を殲滅します。

前 217 年 7 月、ローマ軍は兵 30 万人、馬 14,000 頭を徴発、ティチーノ河畔にハンニバルを迎え撃ちますが、カルタゴ騎兵の猛襲を支え切れず敗北、2 ヶ月後、トレッピアで戦って再び敗北、8 ヶ月後、3 万の兵をもってトラジメーノ湖畔で戦い、ローマ軍は巧みな戦術で包囲され、全滅。ローマは歩兵 8 万、騎兵 6,000 を揃え、ハンニバル軍は歩兵 35,000、騎兵 1 万でこれを迎え撃ちます。

前 216 年 8 月のカンネで古代最大の戦いが行われ、戦史に残る見事な戦術で中央を引き、両側から包囲してローマ軍の戦死者 4 万人、元老院議員 80 人が戦死します。

しかし、当時のローマは同盟軍を入れて兵士 70 万人の動員力がありました。ローマは 20 万人の新軍を編成し、スペインを攻め取り、ハンニバルに協力した都市に徹底した懲罰を加えます。

前 204 年にはスペインから凱旋したスキピオは、新軍団を率いてアフリカに向けて出航します。カルタゴに呼び戻されたハンニバルは 36 年振りに故郷の地を踏み、市の南 50 km のザマに布陣します。ローマ軍は歩兵 34,000、騎兵 8,000、カルタゴ軍は歩兵 5 万、騎兵 3,000、戦象 80 頭で対峙、戦いの前夜、ハンニバルはスキピオの下を訪れ、両雄は肝胆相照らしたといいます。

前 202 年 10 月 19 日、戦象の突進から戦端が開かれますが、縦列の間隔を何時もより広く取ったローマ軍は象の進路を開け、象が駆け抜けて方向転換しかかるところを槍で止めを刺します。カルタゴの騎兵は偽装退却をし、ローマ騎兵が追いかけて騎兵の援護が無くなった歩兵同士の対戦になりますが、新兵が多いカルタゴ歩兵の隊列が崩れ、両翼をローマ歩兵に包まれたところでローマの騎兵が戻って来て、背後からカルタゴ歩兵を攻め、カルタゴ兵死者 2 万、捕虜 1 万 5 千となり戦いは終わります。カンヌの会戦の再現でした。スキピオはハンニバルの戦術を真似て戦って勝利したのです。スキピオは 10 隻を除く全船団の引き渡し、ヨーロッパのカルタゴ領の放棄、賠償金という寛大な条件で講和を締結し、凱旋しました。

ハンニバルは戦後の復興に尽力しますが、「ローマがカルタゴを守る」というローマとの安全保障条約を信じた同胞による「ハンニバルは危険人物だ」という密告でローマから刺客が送りこまれて亡命し、毒杯を仰いで自殺します。享年 67 歳でした。数ヶ月後にスキピオも好敵手の後を追うように亡くなりました。

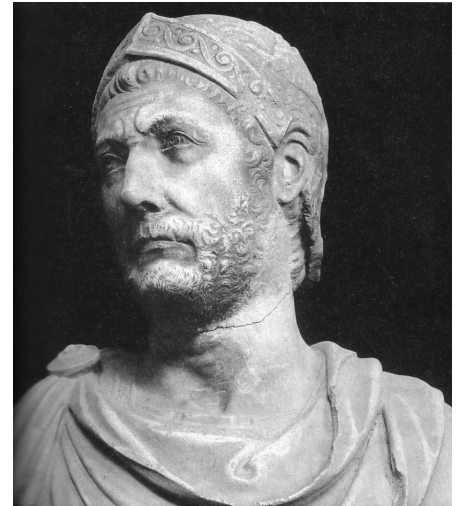
**第 3 次ポエニ戦役**(前 149~前 146) はカルタゴの再起を恐れたローマが、難癖を付けて防ぐために行った殲滅戦でした。「**大国の安全保障を決して信用してはいけない**」とハンニバルは何回も警告していました。皆殺し作戦の後、城壁や建物を破壊し、農地に塩を撒いて耕作不能にし、徹底した破壊工作を実行しています。

**忍び寄る社会不安：**カルタゴなき後、スペイン、北アフリカ、地中海の制海権、莫大な富がローマの手中に落ちます。強力な実権を握った元老院は新陳代謝が減り、元老院議員階級といった階級が固定化し、既得権益を固守して硬直化しました。

「**権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する。**」とは歴史学者・アクトン卿の至言です。この時期からローマの支配階級の腐敗が起き始めます。騎士階級(エクイタス)が興って徴税請負業や公共施設工事の請負等で経済力を付けて行きます。

一方、自作農たちは安価な植民地からの農作物の輸入や大地主の奴隷労働による大規模農場に負けて経済的に立ち行かなくなります。**貧富の格差が急激に拡大し**、ローマの失業率は 7 % にも及んだようです。増え続けるプロレタリアを兵士に徴募せざるを得なくなって、ローマ軍団そのものが弱体化しました。税制や戦利品での分配に同盟国の不満も蓄積します。

**元老院に殺された改革者グラックス兄弟：**内外から忍び寄るこの危機に敏感に反応したのがグラックス兄弟



ハンニバルの塑像

でした。身分は平民でしたが、父は2度の執政官経験者、母方祖父はスキピオという名門です。前133年、「ローマの勝利のために尽くしたはずのローマ市民が何故失業者にならねばならないのか」と訴えて、30歳の兄ティベリウスは護民官に就任し、戦いで得た公有地を公平に分け直す農地改革を進めようとしていました。これに過敏に反応した反対派元老院議員が配下を武装させ、護民官再選を決める平民集会を襲い、ティベリウスと支持者300人を惨殺しました。

9歳下のガイウスもまた、30歳になった時点で護民官に就任し、兄以上の改革的な法律を立案・施行します。農地改革、公共事業による雇用対策、失業者への現物給付、新植民地を建設して失業者を移住させる等、そしてイタリア人全部にラテン市民権を与える法案を出したところで、元老院の猛反撃を喰い、護民官の3選を阻まれ、「共和制の敵」として追いつめられ、自殺します。元老院は彼の仲間3千人も処刑しました。

「内乱の時代」が始まったのです。

後世から見ると、グラックス兄弟がやろうとした改革はカエサルが実現したものの前取りでした。違いは兄弟は武力を持たず、カエサルは持っていたのです。「武器なき予言者は滅びる」のでした。

**マリウスの軍政改革：**失業問題が解決されなければローマ軍の弱体化を招きます。北からの蛮族に敗れ、北アフリカのユグルタ戦役でも敗れ、屈辱的な講和を結ぶ羽目になりました。前107年、執政官に就任したガイウス・マリウスは事態を直視し、兵制を徴兵制から志願制に改め、給与を支払うことにしました。志願制は失業者を軍隊に吸収する失業対策を兼ねています。

職業軍人の誕生です。兵役期間は20年間、この間は結婚は許されません。同盟国の非ローマ市民は、直接税を支払い、「血の税金」兵役の義務も課せられています。しかるにローマ市民にはもともと直接税がない上に「血の税金」も払わなくなったのです。この不平等はローマ連合の結束に決定的な打撃を与え、前91年に「同盟者戦役」が発生します。貧しい8部族が一斉蜂起したこの戦役は2年にわたり、結局、前90年末に「ユリウス市民権法」を制定し、同盟国に暮らす市民がローマ市民権を自由に取りれるようにしました。ガイウスがやろうとしていた通りの政策です。

この軍政改革はもう一つ、軍隊の「私兵化」現象を生みます。これまでのローマ軍は必要がある都度、徴兵を行い、目的が達成されれば解散され、司令官と兵士の関係は誠に淡泊なものでした。ところが職業軍人になると生活がかかっているの、どうしてもボスの顔色を見ます。ローマ人に刷り込まれた「パトローネス・クリエンテス精神」がその傾向を強め、ローマ軍団は「共和国の軍隊」の性格を失い、総司令官の「私兵」になって行きます。ここでローマ史上、初めてのローマ軍団同士の衝突を迎えることになります。

**スッラの共和制改革：**同盟者戦役後、執政官についたルキウス・コルネウス・スッラは保守派であり、平民派を基盤とするマリウスと対立して内乱となり、マリウス側は保守派の上層部を抹殺し、スッラ側は平民派の中核部を抹殺して合計で何万人というローマ人が死に、元老院議員にも100人ほどの死亡欠員ができました。この内乱でローマのエリート層が集中的に大量に失われたのが、その後のローマの活力を大きく奪ったと思われる。

内乱に勝って無期限独裁官となったスッラは元老院の強化を目指して議員定数を倍増して600人とし、騎士階級を取り込み、元老院内の年功序列制度を確立します。護民官制度の弱体化を図り、執政官が率いる常備軍以外は国内に入れないと決めます。私兵化を防ぐため、軍団司令官の任期は1年限りとし、その任地も元老院が定めることとします。軍務が完了すれば直ちに軍を解散することを義務としました。

スッラはシビリアン・コントロールを徹底して、クーデターの再発を防ごうとしたのです。こうした「共和制復古・強化」を実現した彼は、「我がこと成れり」と考えたのか、僅か2年で独裁官からも政界からも潔く引退しました。

このシステムは、シビリアン・コントロールを徹底させる点では大変よくできています。ただし、一旦、戦争が起こってしまうと、実態として守っている訳に行かなくなります。特に、遠隔地の戦争の場合は尚更で

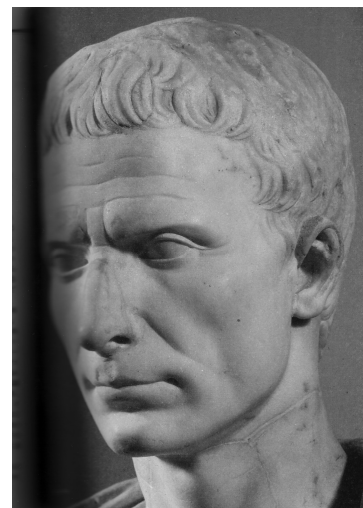


す。という訳で、できて 10 年間は機能しましたが、所詮、守られなくなる運命にありました。

**カエサル登場：**スッラの副官にして女婿のポンペイウス、父親がスッラの副官でマリウスに殺され、スッラが引き立てたクラッスス、それにマリウスの甥であるカエサルの三人がそれぞれ執政官を経て戦地で功績を挙げて実力者となり、三人のパワーバランスでローマが支配された時期があります。これを三頭政治といいます。

ガイウス・ユリウス・カエサル(前 100～前 44)(英語読み“シーザー”、イタリア語読み“チェザーレ”)は真に非凡な人物です。イタリアの普通高校で使われている歴史教科書には、こう書いてあります。「指導者に求められる資質は、次の五つである。知力。説得力。肉体上の耐久力。自己制御の能力。持続する意志。カエサルだけが、この全てを持っていた」。

前の二人は元老院の中の騎士派(新興ブルジョワ派)、カエサルは民衆派です。天敵の筈の彼らは何故、アライアンスを組めたのでしょうか。



カエサルの塑像

(「痛快！ローマ学」／集英社 p129)

クラッススはカエサルに好意を持ち、彼に何回も莫大な金を貸し与えている債権者でした。ポンペイウスは執政官になる際の元老院の各種の熾烈な妨害行為をカエサルが断固として排除してくれた恩義を感じています。カエサルは財務官、造営官を歴任し、スペインで軍人と行政官としての実績を挙げていました。

彼らは協力し合い、元老院に対抗して選挙でカエサルが執政官になります。

貴族派もピブルスという人物を執政官に当選させます。カエサルは盟友との約束を守り、ポンペイウスの東方政策の承認と、その兵士への土地の配分の承認を元老院に求めます。元老院が反対したので、この法案を民会(平民集会)に持ち出します。

嘗てグラックス兄弟もそのようにして暗殺されましたが、武力を持つカエサルには手を出せません。法案は絶対多数で民会を通過し、ポンペイウスはカエサルの娘ユリアを妻に迎えます。この政治的環境の下で、嘗てグラックス兄弟がやろうとしていた改革が次々実現しました。クラッススは念願の専売権を手に入れました。元老院は必死で対抗し、ピブルスは民会で神の思し召しに背くなと絶叫しますが、人々の嘲笑を浴び、汚物を浴びせられ、自宅に引き籠もって執務を放棄します。ローマ人はこの年を「ユリウスとカエサルの年」と呼びます。

カエサルは自分自身を任期 5 年間のガリア属州総督に任命し、次年度の執政官に自分の息の掛かったピソとガビニウスを当選させます。元老院の妨害を封じるために、会議記録を毎日公開するよう法制化して、世界最初の新聞「日報」が誕生しました。秘密性を権威の源にしていた元老院はこれで大打撃を受けました。

前 58 年にカエサルが 4 個軍団約 3 万の兵士を擁して着任した当時のフランスは、ローマ人にはスペインへの交通の要地としてプロバンス地方は知られていましたが、北の方は何があるのか判らない状況で、ガリアという漠然とした地名で呼ばれた未開の地でした。

カエサルは幼いときに習った先生がガリア人だったし、既にローマの属領となっていたピエモンテ、ロンバルディーアのケルト人はガリア人の同族で、彼によって市民権を与えられ、彼の軍団の歩兵部隊の精鋭でした。結果として、彼は絶妙な用兵により最初は少数であった彼の軍団により全ガリアを征服し、遂に尽きぬ軍団の供給源をその手にしたのです。

最初の戦いはヘルヴェティ族 40 万人がスイスから南仏へと侵入、同時にゲルマニア人がライン河を渡ってフランドルに侵入、カエサルは私費で 4 個軍団を徴募し、和議を提案して蹴られると躊躇なく両軍に対して戦端を開きます。二度の会戦は壮絶を極め、数では多かったヘルヴェティ軍は惨敗し、ローマへの服従を誓って許され、故郷に引き揚げます。

ゲルマニア人はオストハイム近傍でほぼ全滅、カエサルの武名は高まります。今後、この種の侵入を避けるために全ガリア部族はカエサルの指揮下に統一せよと要求し、一部が反抗してベルガエ人に援助を求めますが、カエサルは援助に来たベルガエ人を打ち破り、援助を求めた連中を懲らしめ、少し早いガリアを征服したとローマに報告し、民衆は歓喜に沸き、元老院は苦虫を潰します。

この新しい領土は人口 500 万人、面積はイタリアの約 2 倍あります。カエサルがここに一つの国家の統一の基礎を造り、後にこのフランスはローマの言語(ラテン語)と文明を全欧州に伝える事になります。

しかし、母国ローマは内紛に明け暮れており、カエサルがどのような偉業を成し遂げたかについての十分な認識がありませんでした。

彼は毎年、ガリア征服の年次報告を元老院と民会に送ります。前 51 年までの 7 年間に及んだ遠征の記録はカエサル自筆の「ガリア戦記」全 7 巻として現代に残されています。全く無駄がなく、感情を挟まない透徹した文体は名文と評されます。一巻の出だしの文章は、作文の模範として英国の小学校の教科書に載っています。

ガリアは全部で三つに分かれ、その一はベルガエ人、二にはアクィーターニー人、三にはその仲間の言葉でケルタエ人、ローマでガリー人と呼んでいるものが住む。どれも言葉と制度と法律が違う。……(一巻 1 節) ……ゲルマーニー人はこの(ガリア人の)風習とまるで違う。神聖な仕事をする僧侶もなく、犠牲にも関心がない。見てはつきりその力に助けられているもの、太陽や火や月だけを神々としている。その他のものについては噂も聞かない。その生活は狩猟と武事に励むことである。幼い頃から労働と困苦を求める。……ゲルマーニー人は今日も同じ不足と貧乏と忍耐の生活を続け、食物も衣服も変わらない。ガリー人はプロヴィンキアに近いから舶来品も覚え、贅沢や便宜も多く与えられる。ガリー人は幾度か戦争に負けて次第に敗北に慣れ、武勇でゲルマーニー人と争おうともしなくなった。……(六巻 21 節、24 節) (「ガリア戦記」カエサル／近山金次訳／岩波文庫)

カエサルの二度目のイギリス遠征の留守中に、有能なヴェルキンゲトリクスの下にガリアが始めて一丸となって反乱します。カエサルは少数で敵中を突破してローマの主力部隊と合流し、ヴェルキンゲトリクスのいるアレシアの町を防壁で囲んで攻め、ガリア諸族が反乱首領の救援に八方から駆けつけ、ローマ軍はそちらにも向かって防壁を設け、苦しい両面作戦を強いられます。

攻防 1 週間、ローマ軍の糧食が尽きた頃、ガリアの包囲軍で内紛が起こって分裂し、軍規は崩壊して算を乱して撤退しました。ヴェルキンゲトリクスは単身、町を出て降伏します。カエサルは主だったものを厳刑に処した後はいつもの情味ある処置に戻り、飴と鞭を巧妙に使い分けてガリア全土を心服させて行きました。

嘗ての盟友ポンペイウスは何時しか元老院に取り込まれ、カエサルと対立します。元老院はカエサルの執政官立候補を妨害し、軍を解散するか、公敵の汚名を着るか、二者択一を迫りました。

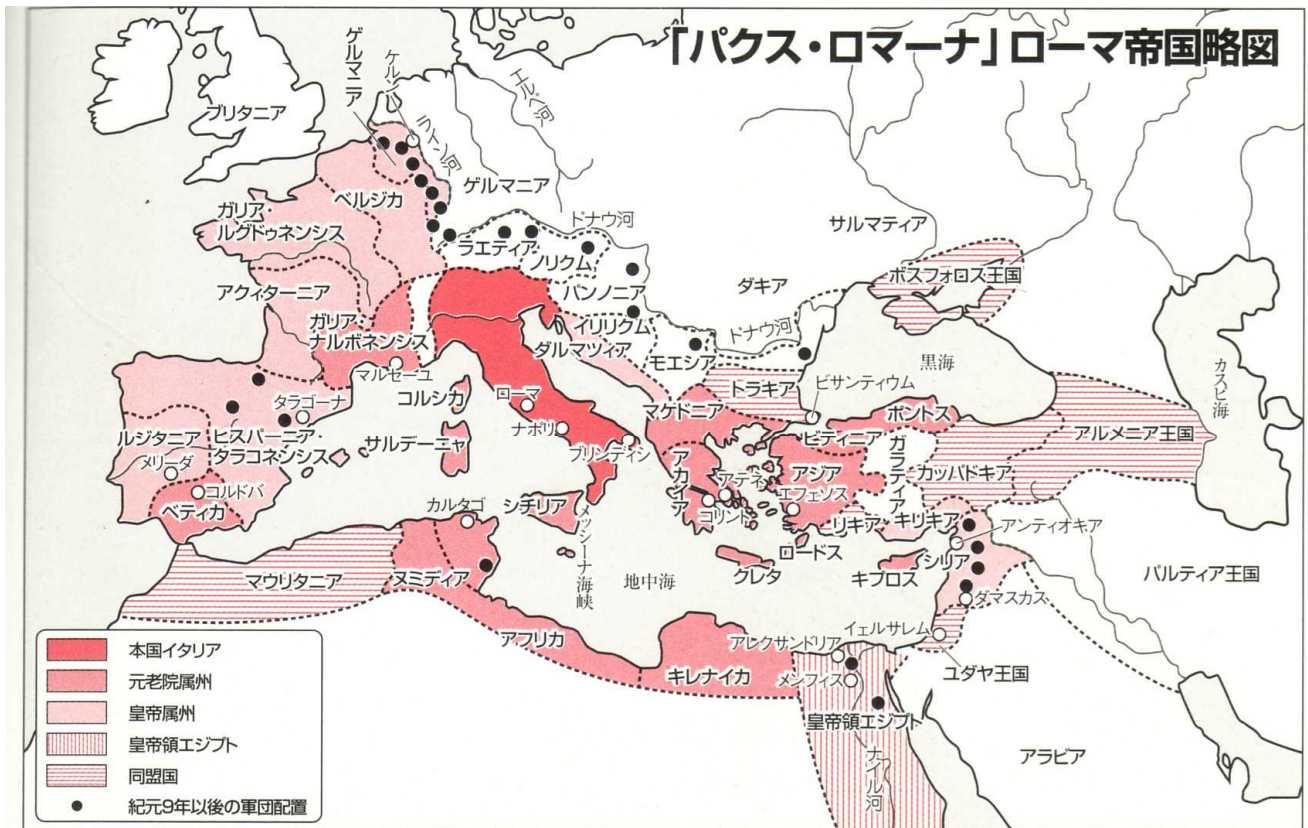
前 49 年、カエサルは「進もう。神々の待つところへ。我々を侮辱した敵の待つところへ。賽は投げられた!」と叫んで、忠実な第 13 軍団 6,000 名を率いてローマと属領の境界であるルビコン川を渡りました。

国家保安全権を与えられたポンペイウスの 6 万の軍勢に向かうカエサルの軍団に第 12 軍団と第 8 軍団が追いつき、更に現地志願兵よりなる 3 軍団が編成されて加わり、カエサルは略奪・暴行を一切禁じ、沿道で歓迎され、無血の進軍をします。

ポンペイウスはひとまずローマでの戦いを避けて撤退し、ギリシャに脱出します。カエサルは先ずスペインのポンペイウス軍を破り、次いでギリシャに上陸しファルサルスの戦いでポンペイウス軍を殲滅、逃げたポンペイウスはエジプトで殺されました。エジプトに来たカエサル(52 歳)はクレオパトラ女王(21 歳)と同棲し、カイサリオンという子までなします。

次いでアレクサンドリア市民の反乱(この時に図書館が類焼)を鎮圧し、小アジアのポントス王の反乱を破り、「Vini vidi vici (来た、見た、勝った)」との簡潔な勝利報告をローマに送ります。

その後も北アフリカ属州やスペインにいたポンペイウス派残党を掃討し、前45年にローマに凱旋します。前44年、カエサルは終身独裁官に就任します。元老院も護民官も民会も形の上では従来通り存在しますが、独裁官在任中は護民官は拒否権の発動が出来ず、ローマの共和制は事実上停止します。この時から事実上の帝政が始まりました。



(上図は紀元24年当時のもの)

(「痛快！ローマ学」塩野七生／集英社 p169)

### 6・3 帝政のローマ Roman Empire

**終身独裁官となったカエサル：**ローマが地中海の制海権を手にした段階で、これだけ国家が大きくなると、外敵の侵入などに迅速に対応できない共和制は適切でなくなっていたのです。カエサルはそのことを理解し、国家運営のシステムを改革しようとしてしました。彼が独裁官として実行した改革の要点を箇条書きします。

- (1) 都市開発を理由として城壁を撤去して「都市国家ローマの時代は終わった」ことを内外に宣言します。この後、300年間にわたって「城壁のない首都ローマ」は存在し続けます。
- (2) 元老院の定員を600人から900人に増員し、ガリアなどの有力者を新しく元老院議員として迎えます。ローマの支配に服せば、そこはローマになる。これがローマに平和をもたらす最良の方法でした。
- (3) 属州税の徴収は評判が悪い徴税業者制度を止め、公的な機関が納税者リストを公開して透明性が高い方式で行うようにしました。公正な納税は属州統治にとって不可欠と考えました。
- (4) 属州の各所に植民都市を建設し、退役除隊する人たちを送り込みます。ローマ軍団の兵士はみな独身なので現地女性と結婚することになり、現地住民の血を引くローマ人が増えるほど属州とローマの一体化が進みます。これも100年前、グラックス兄弟がやろうとした政策です。
- (5) 元老院から造幣権を取り上げ、国立造幣局を開設して金貨、銀貨を作り、基軸通貨としました。ユーロのような統一通貨ではありません。彼は中央集権と地方分権が適当にミックスした世界国家を造ろうとしました。
- (6) エジプトから天文学者、ギリシャから数学者を招き、今日使われている「ユリウス暦」を作りました。7月にユリウス・カエサルの、8月に初代皇帝アウグストゥスの名前が付いています。



- (7) 属州ごとに属州議会というべき自治組織を作らせ、司法や行政の一部を委ねました。
- (8) カエサルは「ガリア問題」とは「ゲルマン問題」であると正しく理解しました。ガリアを安定させるためにライン河の防衛ラインを設けます。同様の考えから、マケドニア地方の防衛ラインはドナウ河、小アジアの防衛ラインは黒海沿岸とユーフラテス河と定め、これらの防衛ラインを堅持すればローマの安全保障は確保され、それ以上の領土拡大は必要ないと考えました。
- (9) カエサルは人種、民族に関係なく、教養学科の教師と医療に従事する医師に無条件で市民権を与え、教育と医療の民営化による競争原理を導入しました。

**カエサルはローマ帝国のグランドデザインを作ったのです。**カエサルは政権に就くや「寛容(Clementia)」をモットーに掲げ、嘗て敵対したポンペイウス派の人々の安全な帰国を保証しました。彼自身がスッラから追放処分を受けた経験から、弾圧や粛正が後々までしこりとなることをよく知っていたからです。カエサルは終身独裁官に就任して自分の護衛隊を解散して丸腰同然でローマの市内を平気で歩いています。しかし、この不用心は結局高いものにつきました。前44年3月15日、ブルータス以下14名の元老院議員によって、カエサルは元老院議場内で暗殺されました。享年55歳でした。

**初代ローマ皇帝アウグストゥス：**カエサルは遺言書で自分の後継者として当時18歳の甥のガイウス・オクタヴィアヌスを指名してありました。ローマへ駆けつけた彼は手際よく遺言書にある莫大な遺産の市民と兵士への贈与を実行、元老院の協力を得て彼の進路を阻むカエサルの副官アントニウスとの長期にわたる激しい内戦を制します。

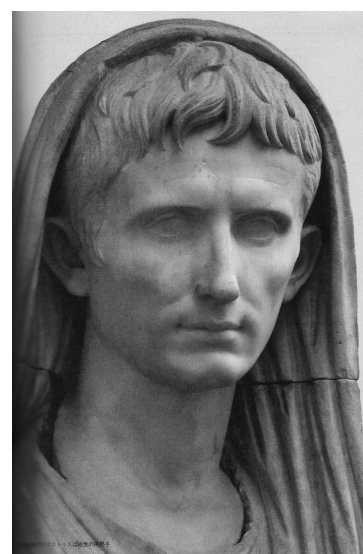
オクタヴィアヌスが難局を乗り切って事実上のローマの支配者となった時には30歳を過ぎていました。

彼はカエサルが皇帝になる野望があると見られて元老院の反対派に暗殺された背景を深慮し、前27年、元老院で全ての権力を元老院に譲り、共和制に戻すことを宣言します。驚喜した元老院議員たちは、彼に「アウグストゥス(聖なる)」という尊称を彼に与えます。更に元老院は「プリンチェプス(第一人者)」と「インペラートル」の称号も与えます。

アウグストゥスはローマ化が進んで統治が楽で実入りも良い属州を「元老院属領」とし、辺境で苦勞のみ多い属州を彼が引き受けることにします。そこは防衛と統治に軍勢力が必要な地域で、元老院は彼に「全軍最高司令権」を与えます。

共和制復帰以後、彼は右腕であるアグリッパと共に執政官を務めますが、前23年、アグリッパ共々辞任し、以後は民会による執政官選出という共和制本来の姿に戻すと宣言します。そして護民官特権を1年間限りで授与して欲しいと申し出、受け入れられます。その付帯事項として「異議無き限り、アウグストゥスの護民官特権は自動更新される」とありました。元老院や執政官の決定を何時でも覆せる「拒否権」を持つことによって、アウグストゥスはローマの事実上の支配者となりました。**初代皇帝がここに誕生した訳です。**

**税制の改革：**税はできるだけ軽く、公平に負担してもらうことが肝要です。アウグストゥスは財政の規模を縮小するため、内戦当時50万人規模であったローマ軍(任期20年)を15万人規模に縮小し、不足**ローマの税制** (『痛快！ローマ学』／集英社 p157)



アウグストゥスの塑像

|     | ローマ市民                                      | 非ローマ市民(属州民)                       |
|-----|--------------------------------------------|-----------------------------------|
| 直接税 | 収入税としてならば直接税はなし<br>奴隷解放税 5%<br>相続税 5%      | 地租税なしし属州税は収入の10%<br>(兵役勤務の属州民は免除) |
| 間接税 | 関税 1.5~5% (オリエント産の贅沢品に対しては25%)<br>売り上げ税 1% |                                   |

を属州から徴募した補助兵(任期 25 年)15 万人で埋めます。補助兵はローマの防衛線に配備され、敵の第一撃を食い止め、その間に軍団基地からローマ街道をローマ軍団が駆けつけて本格的戦闘を行う体制を取りました。

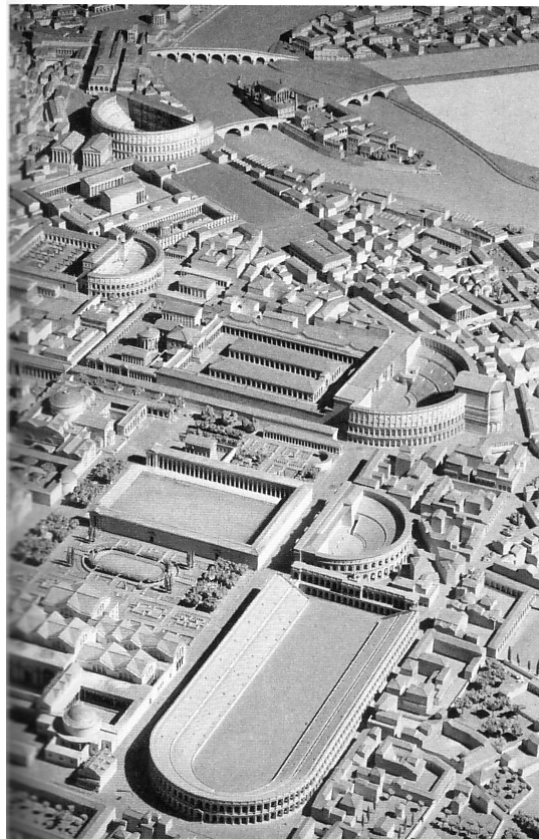
補助兵は任期終了後は世襲のローマ市民権を得て直接税から解放されます。また、市民権は適用者はローマの法律で守られることを意味します。これはなかなか魅力有る志願兵制度でした。奴隷が解放して貰う時に支払う金額の 5%を奴隷解放税として徴収し、一定以上の資産を有する奴隷だけが解放されるようにしたのは一種の貧民防止対策でした。

相続税(5%)も彼の発明です。

間接税はローマ帝国内に 18 ヶ所ほど有る税関を通る時に支払いますが、領主が小さい領地を通るごとにとっていた昔の関税に比べると極めて低額(前頁の間接税参照)でした。属州民の直接税(10%)は属州を防衛する軍団の給与支払いの目的税でした。コンセプトが明快で、不公平感が無い良くできた税制で、その後、数百年にわたって基本線は守られました。

こうしてアウグストゥスは「ローマの平和 Pax Romana」の礎を築いたのです。アウグストゥスは三度目の妻の連れ子ティベリウスを自分の後継者に選び、(紀元)14 年、76 歳で亡くなりました。彼は死に臨んで、「私はこの茶番の役をうまく演じおおせただろうか。もしもそう見るなら、拍手喝采を以て私を舞台から送り出して欲しい」といったと伝えられます。

復元された古代ローマ市街



ローマ中心部の模型

(「痛快！ローマ学」p163)

**ティベリウスの堅実な治世：**「ローマ帝国はカエサルが設計図を引き、アウグストゥスが基礎を構築し、ティベリウスが徹底的に建物を強固にした」と塩野七生氏は評します。ティベリウスは緊縮政策を採り、ローマ帝国の財政を安定させ、アウグストゥスが行ったゲルマン遠征を止めてライン河、ドナウ河の防衛線を固めました。彼は腐敗した元老院に愛想を尽かし、不幸な結婚生活からも逃れて、風光明媚なカプリ島に引き込んでローマの政治を行います。

当然、元老院からは不評判ですが、彼は気にしません。彼は実子の能力を見限り、甥ゲルマニクスの次男のガイウス、渾名カリグラ(兵隊靴)を見込んで後継者に指名します。彼の治世は 14～37 年です。

残念ながら最初は適任と思えたカリグラは分裂症と思われる症状を発症し、親衛隊に暗殺されます。現代の医学者の中には、カリグラの症状は水道システムや化粧品等に多用していた鉛による中毒と似ていると指摘されます。鉛公害は広汎に存在し、ローマ滅亡の一因に数えられることがあります。

親衛隊は故帝の叔父クラウディウス(在位 37～54)を皇帝にさせます。小児麻痺で手足が不自由で発音がはっきりしない人でしたが、意外や有能で善政を行い、ブリタニアを親征し、後の皇帝ヴェスパシアヌスを将軍として育てています。彼の五度目の妻はゲルマニクスの娘アグリッピーナで、最初の夫との息子ネロに帝位を嗣がせるために夫に毒茸料理を食わせて暗殺します。クラウディウスは享年 60 歳でした。

ネロ(在位 54～68)の治世の最初の 5 年間は哲人セネカの意のままに動き、後のトラヤヌス皇帝は「ローマ最良の時代」と定義しています。国境は安全、産業も繁栄しました。



アグリッピナの介入により、セネカが皇帝から離され、ネロはもう誰のいうことも聞かずに暴走します。不在中にローマの大火があり、その犯人扱いされて代わりにキリスト教徒を犯人として大虐殺をします。機を窺った元老院は親衛隊の好意的中立を確認した上でスペイン提督ガルバを皇帝に推戴します。ネロは自殺して暴政は終わりました。

ガルバは「ネロから受けた利益は全部国庫に返せ」と公布したため、最大の受益者であった親衛隊に暗殺されます。帝位を競りに掛けた親衛隊に応じて銀行家オトーが帝位を嗣ぎます。これだけ無理があっても国家が破綻しないくらいにティベリウスが国家体制をしっかりと固めておいてくれたのです。

**フラヴィウス朝：** 余りの乱脈に憤激した二人の将軍が反乱し、戦いに勝ったティトゥス・フラヴィウス・ヴェスパシアヌス(前出)が帝位を嗣ぎます。極めて現実的な彼の治世 10 年間(70～79)は軍部と財政の再建に注力した善政の時代でした。

この時代はネロ在位から始まった第一次ユダヤ戦争(66～70 年)が続いており、70 年に帝位に就いたヴェスパシアヌスは長子ティトゥスを派遣し、エルサレムを徹底破壊し、ユダヤ人を追放します。息子の勝利に気をよくしたヴェスパシアヌスは凱旋式を挙行し、右の写真のような「ティトゥスの凱旋門」を建造します。



ティトゥスの凱旋門

79 年、帝位を嗣いだティトゥスの時代は優しさ、純真さ、寛大さの時代でした。2 年の治世の間にローマの大火、ベスビオス火山の大噴火によるポンペイの埋没、疫病の蔓延があり、ティトゥスは国庫を傾けて救援、自ら看護に当たって感染、42 歳の若さで 81 年に逝去します。

彼の跡を継いだ弟ドミティアヌスは 15 年間(在位 81～96)は熱心に立派な政治を行いましたが、或る時点から突然、陰謀があるとの強迫観念に囚われて暴虐の限りを尽くすようになり、55 歳で暗殺されます。アウグストゥス以後 126 年間(前 30～96)に 10 人の皇帝が立ち、7 人が非業の死を遂げています。

**6・4 五賢帝時代：** 96～180 年はローマ帝国始まって以来の平和な時代でした。歴史家ギボン(前出)は、この時代を「**人類が最も幸福であった時代**」と評しています。元老院はこの機会に、議員の中から皇帝を選出します。

一番目の**ネルヴァ**は既に 70 歳を超す高齢者でしたが、2 年間の治世に追放者を呼び戻し、土地を貧民に分配し、ヴェスパシアヌスが定めたユダヤ人の貢納義務を免除し、財政を再建し、十分に重責を果たしました。

二番目の**トラヤヌス帝**(在位 98～117)は剛健な軍人で教養人としても名高い人でした。トラヤヌスの時代にローマはその版図を最大限に広げました。トラヤヌスの時代は都市計画、工学、建築の歴史の頂点を極めます。巨大な水道工事、オスティア新港建設、四大街道建設、ヴェローナの円形競技場、トラヤヌス広場等です。この機会にローマ水道を見てみましょう。次頁の右上の地図に 11 本の水道が書かれています。最長がマルキア水道で全長 91 km、最短がアッピア水道で 17 km です。水路は防衛と衛生管理から地下を通され、河川上は水道橋で、山はトンネルで優れた測量技術を駆使して一定の緩やかな勾配でローマ市まで給水します。中央広場や貴族の庭園には立派な噴水も設置されていました。下水道も完備されています。トイレも水洗方式

でした。

三番目は**ハドリアヌス帝**(在位 117~138)です。40歳で帝位に就いたハドリアヌスは拡大し過ぎた版図を適正なサイズに戻した現実主義者です。直ちにペルシャとアルメニアから撤退したが、拡大主義の将軍たちと深刻な路線対立があり、結局、数人の軍の上層部を処刑して自分が正しいと思った政策を遂行しています。その後のケアが良かったようで、このことにより軍部は離反せず、彼に心服するようになりました。

反作用が大きい真の改革をやり遂げようと

する人は、彼のやり方を見習うと良いでしょう。彼は元老院の監督だけで完璧に機能する官僚組織を作り上げ、官僚制の後世の模範となります。また、乱発されて混乱していた法律体系を整理しようとします。好奇心も強く、ローマの版図の実態視察に多くの時間を割き(最長は5年間)、現実的な判断から防衛の難しいメソポタミヤの放棄、防衛線の強化など優れた行政を行います。

勇気ある軍人で、用兵にも長けており、軍縮政策を採りながら兵士たちの強い支持を受けています。21年の治世の後永眠、享年62歳でした。



ローマ水道の経路図 (「ローマ完成への道」/ニュートン誌 p41)

四番目は**アントニヌス・ピウス帝**(在位 138~161)です。公正な管理により吝嗇の弊に陥ることなく帝国資産を過去最大の27億セルテルティウスにまで蓄積しました。先帝の法整備を引継ぎ、夫婦の権利は平等になり、拷問はほぼ全廃され、奴隷の殺害が犯罪と見なされるようになりました。

出不精な人でした。幸福な人で、在位中何の事件も起きませんでした。74歳で生まれて初めて病気になり、甥のマルクス・アントニヌスを後継者に指名し、死にました。

**マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝**(161~180)は40歳で帝位を嗣ぎます。「私は神々に深い恩義がある。よい祖父母、よい両親、よい妹、よい先生、よい友を授かったから」と彼は書きます。善良なモラリストの彼は禁欲生活を強化して臣民の模範たらしめました。だが、時代が良くなって、ブリタニア人、ゲルマニア人、ペルシャ人らが辺境を荒らし始めます。ペルシャからの凱旋将軍が運悪くペストを持ち帰り、ローマ市だけで20万人以上死亡します。ペストは半島全土に広がり、町も村も住めなくなり、飢饉が始まります。彼はゲルマン諸族の侵略を食い止めるため自ら出陣し、獐狂極まる諸族を全部鎮圧して廻ります。戦塵の中でギリシャ語で書き綴った「瞑想録」は古典世界が残した最高のモラルの法典です。

ここまでがローマの黄金期といってよい時代でした。

## 6・5 混乱のローマ帝国

この後はローマの解体工程といってもよい混乱の時代に入ります。歴代皇帝の名を挙げると、剣闘士向きのコンモドゥス(192 没)/ユダヤ系アフリカ人の将軍セプティミウス・ディディウス(211 没)/その子カラカラ(217 没)とゲタ/少年皇帝エラガバル/その従兄弟アレクサンデル(235 没)/将軍マキシミヌス/デキウス/捕虜となったヴァレリアス/その子ガリエヌス/ペストに倒れたクラウディウス二世(270 没)/名将ドミティウス/在位半年のタキトゥス/屯田兵化を試みたプロブスなどです。

次が親衛隊隊長だったディオクレチアヌス帝(在位 284~305)、この人が「帝国四分制」(正帝2名、副帝2名)

を実行します。彼は計画経済化、産業の国有化、官僚制の強化・拡大を図ります。貨幣は金との兌換制となり、その制度は約 1,000 年間続きます。職業階級は固定化され、各人は同業組合に凍結され、脱退は認められなくなります。食糧管理制が公布され、厳重な価格統制が行われます。301 年の勅令は今なお統制経済の傑作と評されます。

ローマ史始まって以来、初めて国境を越えて帝国から逃亡するローマ市民が現れるのがこの時期です。軍制と行政が画然と分離されたこの体制で軍は戦争に集中でき、一時的にローマの治安と防衛は強化されました。しかし、市民を主権者と見なしていたローマ法の問題はここで死にました。やがて至る所で土豪たちが国家を代行し、国家に対する抵抗力を強め、遂には領主は武装して無組織、貧困、非武装の大衆を踏み付けます。法も権利も秩序もなくなり、大衆は領主の意のままになります。**中世の始まり**です。

## 6・6 多神教からキリスト教へ

前述副帝の庶子であるフラヴィウス・ヴァレリウス・コンスタンティヌス(在位 306~337)は一時期、6 帝が相せめぐ混乱状況から抜けだし、相次ぐ戦いを制して 324 年、ローマ帝国を再統一します。彼は既に 313 年にミラノ勅令を出して、帝国内であらゆる宗教を寛容することを公布しており、彼の母はクリスチャンで、当時から彼はキリスト教徒のチャンピオン視されており、彼の軍隊の圧倒的多数がクリスチャンでした。再統一を以て遂に**キリスト教がローマの国教**となります。330 年に帝国の東方交易都市であるギリシャ人の植民都市であったビュザンチオンに新首都コンスタンティノポリスを建設します。現在のイスタンブールです。もはや、ローマ帝国という名の他に、ローマ的なものは何一つ残っていません。337 年の復活祭の日、彼は死期を悟り、司祭を呼び、秘蹟を求め、紫衣を脱いで白の洗礼服に着替え、静かに死を待ちました。

この後、一騒動あって実子の一人コンスタンティウス(在位 337~361)が帝位を取り、次いで従兄弟のユリアヌス(在位 361~363)が帝位を嗣ぎ、ペルシャ軍との戦闘中に投げ槍を受けて死にます。諸将の中からヨヴィアヌスが帝位を嗣いだが愚劣な講和を結び病に倒れ、ヴァレンティニアヌスが推戴され、彼は西ローマ帝国を治め、弟ヴァレンスを僚帝にしてコンスタンティノポリスを含む東ローマ帝国を与えます。

西ローマ帝国はその後、グラティアヌス帝はブリタニア総督により暗殺され、ヴァレンティニアヌス二世は親衛隊長アルボガストに暗殺され、ヴァレンス帝を嗣いだテオドシウス帝は 394 年、東アルプスの峠道でアルボガストと決戦となり、勝ったテオドシウス帝はミラノに凱旋するが 50 歳に満たない若さで病没、その遺言で 395 年、11 歳のホノリウスが西ローマ帝国の帝位を嗣ぎ、兄のアルカディウスは東ローマ帝国の帝位を嗣ぎます。

配下の(ゲルマン民族の)ヴァンダル族出身だが真のローマ魂の持ち主、スティリコ将軍が獅子奮迅の働きでゴート族のアラリックの侵入を防遏します。**もはや兵士にはイタリア人は見当たらず、傭兵対傭兵の戦いになっているのです。**兵士を必要としたスティリコ将軍はイタリア人に徴兵令を発しますが、イタリア人は徴兵制絶対反対を唱え、一方では敵に屈しようとしているとの理由でスティリコ将軍を告発します。

兵士も無しでどうして祖国を防衛すればよいのでしょうか。嘗て日本の二大政党の一つであった**社会党の言い分**そっくりです。ラヴェンナに引き籠もっていたホノリウス帝は国政の実権を取り戻したい意図もあり、将軍の 10 年間の忠誠を忘れて彼を処刑します。最後の希望の星を自分たちで消してしまいました。

これでローマ軍はブリタインを維持できなくなり、ガリアにはゲルマン族が侵入、西ゴート王国のアラリック一世が 410 年ローマを攻略し、3 日間にわたって部下に略奪させます。この光景に世界が震撼します。**西ローマ帝国の終焉**でした。

この後も東ローマ帝国は版図を失いながらも命脈を保ち続けますが、1453 年にメフメト二世率いるオスマン

トルコにより、2ヶ月間の攻撃を受けてコンスタンチヌス 11 世が敵軍に突撃して果てるまで、細々と命脈を保ちますが、それは**中世**に属するテーマになります。

## 6・7 ローマの文明

**ローマ法：**ギリシャ哲学やキリスト教と共にヨーロッパ文明を特徴付ける重要な要素がローマ法で、現代ヨーロッパの**法律体系はローマ法が基礎**になっています。共産中国の様な恣意的な人治がはびこる社会ではなく、法律に基づく透明性が高い政治が行われる社会システムの基礎になります。

ローマでは法典化されたのは前 449 年制定の「十二表法」から 530 年のユスティニアヌスの「市民法大全」まで進化し続けており、日本の法律もローマ法から多大の影響を受けています。市民の自由や所有権、契約、法律の非遡及、復讐の禁止、時効、損害賠償、陪審制度などお馴染みの近代法概念はローマ法を起源としています。

**交通制度：**ローマ街道には約 1 km おきに里程標(マイルストーン)が置かれ、約 10 km おきに「駅」があつて食堂、宿舍、厩舎、貸馬が備わっており、約 30 km おきに「宿場」がありました。警察の巡回はありましたが、安全を守るため富豪は車馬を連ねて旅行し、武装した従者に守られて車中で眠りました。

帆船は 1,000 トン級で、船室も豪華でした。アウグストゥスが地中海警備艦隊を作ってから、海賊はいなくなりました。速度は平均 1 時間に 11 km で、海図や灯台もありました。旅行は盛んで、青年たちは大旅行の経験を積んで始めて教養が完成されると考えていました。

世界的にも 17 世紀になるまで、これほど見事な交通組織は回復されませんでした。

**郵便・通信制度：**郵便制度は基本的には国家の通信にだけ利用され、特別の許可があれば民間人も利用できました。緊急通信は高地に灯台を建て、光の信号を送りますが、この方式はナポレオンの頃まで変わりませんでした。

**ローマの大浴場：**カラカラ帝の大浴場は敷地 225m×185m、高さ 38m、フリギダリウム(冷浴室)、テピダリウム(温浴室)、カリダリウム(熱浴室)と入り、最後はプールの水泳で締めます。二ヶ所のトレーニングジムもありました。熱源は地下室の石炭火力でした。これほど洗練された入浴作法を持つ人類は空前絶後です。ローマの官吏は朝 4 時から蝋燭の明かりで仕事を始め、午前中に仕事を済ませ、午後到大浴場に行く生活パターンを守ったようです。寒い地域では、大浴場に大きな板ガラスで密閉した日光浴室まで備えています。

**貨幣制度・金融：**属州総督が貨幣鑄造権を持っていたから、通貨制度は複雑でしたが、銀行家はその違いを利用して利益を挙げました。

アウグストゥスがエジプトから持ち帰った財宝を貨幣として流通させて経済に活を入れようとして経済がバブル状態になり、激しいインフレになり、市民の生活が困窮します。その対策としてティベリウス帝が過剰な貨幣を流通過程から吸い上げて総需要抑制によりインフレ終息を図りましたが、インフレを期待して借金していた連中は銀行から預金を下ろして資金繰りせざるを得ず、預金引き出しに人々が殺到しました。バルブス・オリウス銀行は現金不足となり窓口を閉鎖します。この銀行の融資に頼っていた工場や工房は、経営は上手く行っているのに現金が手許になくなって、小売り商人に現金を支払うことができなくなり、黒字倒産に追い込まれました。恐慌は拡大し、最大の銀行マクシムス・ヴィポも預金者の引き出し要求に応えられなくなり、ペッティウス銀行に援助を乞いますが、このニュースは瞬く間に広まり、当のペッティウス銀行が預金者の取り付け騒動に見舞われ、同業のピンチを救うどころではなくなりました。属州の経済も本国の経済と密接に関連していたので、リヨン、アレクサンドリア、カルタゴ、ビザンティウムでも銀行が連鎖倒産し、



小農民は収穫を待たずに借金返済を迫られて債務奴隷となり、自殺者も続出します。高利貸しがのさばり、物価は急降下してデフレ状態が続きます。さしも頑固なティベリウス帝も遂にこの不況よりもインフレの方がましだと認めざるを得なくなり、国庫から巨額の資金を銀行に配分し、超金融緩和策として向こう3年間無利子で貸し出すように命じてやっと経済の混乱が収まり、信用システムが回復しました。

日本が1980年代のバブル経済の後、1990年代から2005年頃まで「失われた15年」といわれる長期経済不況を経験し、2002年、政府が公的資金を銀行に投入してやっと超不況を脱出しましたが、2012年現在も世界で日本だけがデフレ状態から脱出できずに国家としての体力を長期に亘って衰弱させています。1989～1992年にかけて「第二の敗戦」と言われる国家自殺的経済運営を行った日銀総裁と大蔵省次官たちは「愚者は経験に学ぶ」人たちでありました。彼らにそのような政策を執るよう世論を誘導し、バブルが潰れると、「日銀総裁は平成の鬼平だ」と褒め讃えたマスコミも同罪です。「賢者は歴史に学ぶ」人たちであつたら、ティベリウス不況に学んで、もう少し巧妙な政策が打てたと思います。日本のエリートたち、即ち点取り虫たちは学習効率が悪い歴史を熱心には勉強していません。その報いがこうした稀代の悪政となって現れたのです。2008年にはアメリカを発信地として世界的に現在もその後遺症が残るリーマン不況が起こりますが、1990年代の日本が反面教師となって各国政府は急いで銀行に資金を投入し、日本のような惨状になるのを防ぎました。資金は国債発行で調達して銀行の負債を国家の負債に付け替える方式であり、上手く行ったアメリカは立ち直りが早かったのですが、EU諸国はその後遺症に今も悩んでいます。

**演劇・スポーツ・闘技：**紀元元年頃のローマの暦には現代と同じ位の76の祝祭日があります。演劇は観客の大部分が外国人であるためラテン語が判らないので、身振りと手振りで筋が判る大芝居に流れます。

競馬等のスポーツ競技は大人気で、官報にまで試合の予想と戦評を載せます。

最も人気があつたのは剣闘競技です。

右の写真はティトウス帝の時代(80年)に完成したローマのコロッセウム(円形闘技場)で、長径188mの楕円形、高さ44mで45,000名の収容人員を有します。



ローマのコロッセウム Colosseum

上部は開放ですが、可動式の日除け設備がありました。床面に板が敷かれ、砂(アリーナ)を敷

き詰めて闘技をしました。写真の中央部の間仕切りの列は地下の猛獣の檻と剣闘士たちの控室でした。

30数カ所の入口から観客は入場します。大理石の席は貴賓席で、その中央に皇帝が一際高い席に座ります。プログラムは例えば、①各種猛獣の大打進、②動物の試合、③闘牛、④最後に人間同士のデスマッチです。若い少年も入場を許されました。入場料は無料、座布団も食事は一切無料です。アウグストゥス主催の或る興業は八日間連続開演で1万人の剣闘士が参加しています。コロッセウムの大理石は後のサンピエトロ大聖堂に流用され、他の石材も大量にローマの多くの建築に流用され、現存する石材は当時の1/3といえます。

**ローマの食事と宴会：**現代と比べても文句なしにローマが上です。ローマにはリビヤのザクロ、ガリアのハムとワイン、スペインのピクルス、アルプスから運んだ雪で作ったシャーベットなど各地の贅沢な食品が運び込まれてきます。養殖の牡蛎、雲丹も珍重されました。鯛は死ぬまでに7回色が変わるのを見てから調理する凝りようです。

食事は長椅子に寝転がって手掴みで食べ、食事服で手を拭きます。貴族の宴会は午後4時頃から始まって深

夜まで続きます。満腹したら上を向いて口を開ければ、給仕が孔雀の羽で喉をくすぐります。そして吐いてはまた食べる凄まじさはとても今の人では真似ができないでしょう。美食家ルークルスの豪華な食事に関する数々の逸話は今日まで語り継がれています。

**ローマ軍団：**共和制ローマの軍団は、二人の執政官が指揮する常備2軍団以外は必要な都度市民から集められ、終われば解散する短期間しか存在しない軍隊でした。前331年から軍制も古典的な密集方陣から歩兵中隊制に改革されました。

戦力の中核となる重装歩兵はクインカンクスと呼ぶ千鳥格子状に3列に並び、第1列は若年者と新参兵、一段引いてずらした位置の第2列は戦闘に熟練した20代後半から30代前半の者たちが並び、第1列の後方に間を空けて第3列の古参兵が控えます。約5分間戦闘すると疲労して戦闘力が低下するので次の隊列の兵士たちと交替し、常に元気な兵士が最前線に現れる戦闘体制をとります。戦闘中に戦闘グループが入れ替わるのは非常な熟練を要しますが、兵士たちは日常の厳しい訓練でそれを体得しているのです。

彼らは青銅の兜と楯と防具を持ち、武器は敵の楯に突き刺さると抜けなくなる投げ槍と刃渡り約70cmの短かい剣を背負い、腰に短剣を挟みます。携帯食糧とスコップ等の工具を含め約20kgの荷物を背負って、1日約30kmを行軍しました。常に前後左右に約1mの行動の自由がとれる空間を保ち、突然の敵襲では荷物をその場に投げ捨て、即座に戦闘態勢に入りました。カルタゴ等の大国との戦争を除いては、敵軍は組織化されていない蛮勇だけが頼りの相手や傭兵が多く、訓練が行き届き、戦意が高いローマの市民兵には対抗できませんでした。

帝政時代に入ると、属州を窺う外敵に備えて軍団(レギオン)は軍旗と輝かしい戦歴を誇る常備軍となります。1軍団の規模は約8千人から6千人で歩兵は百人隊長(ケントゥリオ)が、騎兵は十人隊長が指揮します。野営時は8人の兵士がテントと炊事用具を共有し、大規模軍団でも数十分間で迅速に野営の設営と撤収ができました。軍団は多くの野営随行者や使用人や奴隷を連れているため、実際の戦闘員は通常4,800人程度で最大6,000人まで増やすことができました。

**文明というソフトパワー：**ローマ人の征服はローマ軍団の軍事力というハードパワーだけで成し遂げられたものではありません。同時に、**道路、上下水道、大神殿、円形劇場、大闘技場、大浴場**といった文明の産物を各植民都市へ持ち込み、地元民も文明の到来を歓迎し、その恩恵に存分に与ったのです。

ローマ帝国の征服には、このようなソフトパワーの存在も大きかったようです。ただ、これらのインフラは成長期には良くて、衰退期になるとこれらの膨大な社会的インフラのメンテナンスが重荷になり、その衰亡を加速させたともいいます。

田中角栄の列島改造論に始まった日本の公共事業天国が今日の国家財政

危機の原因となった日本の現状と重なる部分があります。この間に各地の自治体にはハコモノと言われる多数の美術館、音楽ホール、公会堂が残され、それを活用するノウハウもないままに各地で朽ちて行く寒い現状は、遠くローマに及びません。



99/5/16 ローマ水道橋 Pont du Gard の威容



## 6・8 ローマが果たした歴史上の役割

ローマは前 753 年の建国から 410 年の西ローマ帝国の滅亡まで、凡そ 1,160 年間の長きにわたって国体を保ちました。特に地中海制海権を確保した前 202 年から五賢帝時代の 180 年までの約 380 年間は**ローマの平和 Pax Romana**と言われる人類史上の黄金時代を築きました。中世に興り、近代の扉を開かせることになった**ルネッサンス Renaissance**とは(ローマ文明)復興運動のことです。ローマを総括したインドロ・モンタネッリ氏の次の文章を読んでください。

あらゆる大帝国のならいで、ローマ帝国も外敵に打ちのめされたのではなく、内患に倒れた。……多くの研究者は、ローマ滅亡を二つの要因に帰する。キリスト教と蛮族侵入である。だが、私はそう思わない。キリスト教は何一つ破壊していない。唯、屍体を埋葬しただけである。つまり、誰一人信じなくなった宗教を葬り、そこにできた穴を埋めたに過ぎない。

……外敵についていえば、ローマ千年の歴史を通じて、常に外敵の危険は存在した。ゴート族、ヴァンダル族、フン族は、カエサルやマリウスが対戦殲滅したキンブリ族、テウトネス族、ガリヤ諸族より恐るべき戦士だったと誰がいえようか。アッティラがハンニバルより優れた将だったという人はあるまい。……だが、軍制の危機もまた、より深刻な生態学的危機の結果に他ならない。それは家族の崩壊と避妊、中絶の普及によって上流階級から始まった。ナポリの諺に「**魚は頭から腐る**」と言う。誇り高いローマ貴族階級は、恐らく世界が嘗て持った最も偉大な指導階級で、純潔、勇気、愛国の規範を数世紀にわたって提供し続けたが、ポエニ戦争後、特にカエサル以後、利己主義と悪徳の模範となり始める。この諸家系は、戦争、内乱、政治的迫害のため子弟を多く失ったが、それら名門の断絶の主因は、子供がなかったことにある。カエサルやヴェスパシアヌスなどの大改革者は、地方農村中産階級の健全な家庭に依拠しようとした。だがこちらもまた急速に腐敗し、次の世代はしようのないやくざ者ばかりになった。悪い手本は直ぐに広まるもので、ティベリウスの時代には既に、農村に産児奨励補助金を出さなければならぬほどだった。農村も産児制限を行い、次第に過疎となった。ペルティナクス帝は、無人化した農場を、耕す気のある者に無料で提供した。そして、道徳的真空の結果生じたこの物理的真空に、外国人が浸透してきた。この過程が非常に急速だったから、ローマは彼らを吸収同化する暇がなく、また彼らに依拠して新しい生命力に満ちた社会を作る余裕もなかった。

同化作用が働いたのはカエサルまでである。彼はガリア人にローマの生活に参加するよう呼びかけ、市民権を与え、官吏に育て上げ、将校に引き上げ、遂には元老院の議席まで与えた。だがゲルマニア人にはこの同化作用は働かなかったのだ。一方、東方諸民族は確かにローマ文化に浸透したが、もっぱら文化を退廃させる役割を演じただけだった。この両者が相まって同化過程を解消し、破局をもたらしたのである。……

……ローマは使命を帯びて生まれ、それを果たし、それと共に死んだと言える。その使命とは、ギリシャ、オリエント、エジプト、カルタゴなど先行文明をまとめ上げ、ヨーロッパと地中海全域に普及し、根を下ろさせることである。哲学でも芸術でも学問でも、ローマの創造したものは少ない。だがその普及の道を開き、その防衛軍を提供し、その秩序正しい発展を保証する膨大な法律体系を用意し、その普遍化世界化のための言語を完成したのは、正しくローマだった。政治形態についても、ローマは何も創始しなかった。君主制と共和制、貴族政と民主政、自由主義と専制、これらは皆よそで実験されていた。だがローマはその全ての模範を生み出し、どの政治形態においても、実践と組織の天才を発揮して、見事な成果を挙げた。……

(「ローマの歴史」 p391~394)

この章で参考にした文献：

「痛快！ローマ学」 塩野七生／集英社インターナショナル

「ローマの歴史」 I.モンタネッリ著／藤沢道郎訳：中央公論社

## あとがき

このテキストはメソポタミヤ文明、エジプト文明、ギリシャ文明を集大成したローマというスタンスで構成しました。貴方はいろんな点で、古代文明は以前に想像していたよりも遥かに進歩していたなと思いませんか。

ここには現代に通じる多くの教訓が実際に起こった事件として散り嵌められています。人類は既に、人間性について数多くの社会実験を実行し、多くの問題について後世に解答や教訓を残してくれています。

**環境危機**についてはシュメル史(7~8 頁) とエジプト史(9~10 頁) に、**格差社会**についてはギリシャ史(18 頁) とローマ史(24、28、29 頁) に、**少子化**についてはギリシャ史(18 頁) とローマ史(40、41 頁) に、**戦時における人間の愚かしさ**についてはギリシャ史(16、19 頁) に、**バブル経済と公的資金投入**についてはローマ史(38 頁) に、**大国の安全保障条約が当てにならない**ことはローマ史(28 頁) に、それぞれ立派なお手本があります。

「賢者は歴史に学ぶ」といいます。貴方は賢者になってください。

ローマ史を総括して、モンタネッリ氏はローマが最終的に滅亡した原因は少子化だと結論しています。

高い生活水準を享受した都市の小市民はその生活水準を守りたいために産児制限をします。中世に絢爛たる光芒を残したイスラーム都市でも全く同じことが起っています。現在の日本も同じ理由で少子化に悩んでいます。しかし、私は人口の減少は必ずしも悪い事ばかりとは思いません。

ペストで人口が激減した中世ヨーロッパでは、生き残った人たちは非効率な農地を捨て、生産性が高い農地や生産分野に集中したために経済が豊になり、やがて少ない人口ながら以前より大きくなった経済力を獲得して今日に残る多数の立派な大聖堂を建て、ルネッサンスへと進み、近代文明の基礎を造り上げました。

「歴史は繰り返す」といいますが、全く同じに繰り返すものではありません。環境条件が同じで、人間性が主な要因となる領域では全く同じに繰り返す可能性が高いですが、環境条件そのものが前例のないものである場合は異なる対応をせざるを得ません。

現在、人類は地球の急速な温暖化という危機に直面しています。環境危機といえばイースター島、米国の先住民都市アナサジ、グリーンランドのバイキング植民地等多くの悲惨な先例があります。勿論、今回の地球温暖化は約 1 億年に 1 回発生し、約 1 千万年も回復できなかった過去数回あった巨大環境災害の再現になる危険度が極めて高い容易でない事態と考えられています。人類の歴史だけでなく、地球と生物の歴史まで振り返って、人類の叡智を結集してこの難局に当たることを期待します。

次のテキスト「**地球と生物**」でもっと大きい時間軸になる地球の歴史を説明しましょう。

このテキストが貴方が本格的な歴史書を読むための切っ掛けになれば、これに勝る喜びはありません。貴方の精神と肉体の健全な成長を祈ります。

以 上



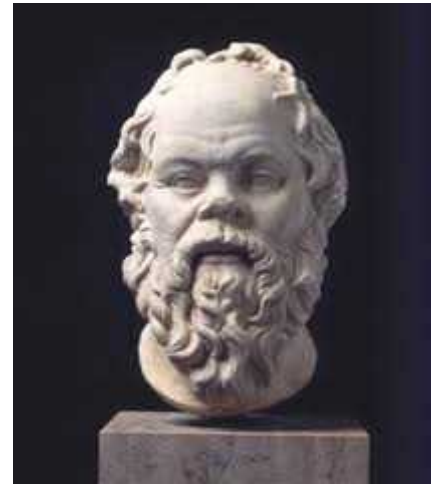
補遺：

## 1. ギリシャの三哲

古代ギリシアの哲学者として、それぞれが師弟関係にあるソクラテス、プラトン、アリストテレスの三人が「ギリシアの三哲」と呼ばれ、ヨーロッパ哲学界の創始者として位置づけられています。

### ソクラテス Socrates

前469～前399(70歳)のアテナイの人。彼はペロポネソス戦争において、重装歩兵として二度実戦に参加し、その勇猛果敢ぶりは熊との渾名に残っています。ソクラテスは弟子から「ソクラテス以上の賢人は一人もいない」とのアポロンの神託を聞かされて驚き、当時、賢人と呼ばれていた政治家や詩人や手工者等の人々を訪ねて「自分にアポロンの宣託通りの智慧があるかどうか」を検証するために対話を行います。その結果、彼らの無知に対する無自覚ぶりと、無知を自覚している自分の優越性、神託の正しさを確信し、(悪妻といわれるクサンチッペは怒りましたが)家庭を顧みず、極貧生活も厭わず、歩き廻っては出会った賢人たちと問答を通して相手の無知を指摘して行くことをライフワークとします。



暇を持て余した富裕階級の子弟たちが面白がってソクラテスに付いて廻り、その試問を参観し、自分で真似する人たちも現れました。当然にこの遣り方は相手の怒りを買ひ、多数の敵を作ります。また、彼の弟子と看做された人たちからアテナイに害を成した二、三の人物が出たため、アテナイの市民からの非難が彼に集中しました。彼が「ダイモニオンと呼ぶ人格(潜在意識)から思想が悪い場合は諫止を受ける」と語っているため、「アテナイの国家が信じる神々とは異なる神々を信じ、若者を墮落させた」罪で告訴され、死刑判決を受けました。彼は亡命や脱獄のチャンスがあったのに、そうはせずに弟子たちと語り合い、毒杯を呷って死に赴きました。弟子であるプラトンの「ソクラテスの弁明」にその詳細があります。

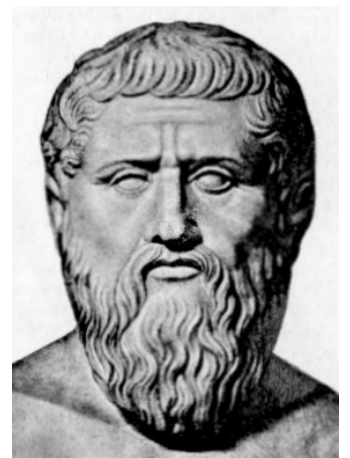
彼の思想は「神のみぞ知る」という彼の常套句にあるように、神々への崇敬と人間の知性の限界(不可知論)を前提とする伝統的・保守的なものです。彼が特筆されるのは「無知の知」を背景とした「知っていることと知らないこと」「知り得ることと知り得ないこと」の境界を巡る突き詰めた探究心と節制心にあります。ソクラテスがヨーロッパ思想に貢献したものの中で最も重要なのは彼の弁証法であり、ソクラテスの問答法とも言われているものです。ソクラテスは神や正義などのような問題を探求する時に、この弁証法はよく使っています。(マイケル・サンデル教授の「さあ、正義について語ろう」等の弁論がその流れを汲みます)

### プラトン Platon

前427～前347(80歳)のアテナイの人。プラトンの思想は西洋哲学の源流であり、「西洋哲学の歴史とはプラトンへの膨大な注釈である」と評されるほど、その後の哲学で論じられたあらゆる概念はプラトンの著書の中に見出されるそうです。アテナイ最後の王の血筋を引く貴族の子息として生を受け、アリストクレスと命名されていますが、隆隆たる体格のレスリングの名手でもあり、師匠が肩幅が広いところから「プラトン(広い)」との渾名を付け、それが今日まで本名として定着しています。

若い頃は政治家を志しますが、やがて幻滅を覚え、ソクラテスの門人として哲学と対話術を学びました。「師が自分では何も書き残さなかったのに対して、プラトンは見聞するあらゆることを書き残した」と評されます。

初期のプラトンは「敬虔」や「勇気」などの伝統的な徳の本質や、それが他人に教えられるものなのかを追求して、挫折しています。



中期のプラトンは、世界を「現実界」と、その元になる完全にして真実の「イデア界」に分けて考えるイデア論を展開します。プラトンは初めて理論的に人間の心について考えようとした人で、魂の三分説を唱え、霊肉二元論やデカルトの物心二元論の源流の一つとなっています。

後期のプラトンはアテナイ郊外の所有地にアカデメイアという学校を開設し、青少年に対し天文学、生物学、数学、政治学、哲学等を教育しています。アカデメイアの入口には、彼のモットー「幾何学に精通せざる者、ここに入るべからず」と記されていました。そこでは対話が重んじられ、教師と生徒の問答により教育が行われました。弟子たちは**アカデメイア学派**と呼ばれます。そして、ここでの真理探究の手法、教育のスタイル等がその後のギリシャ及び西欧社会の知的活動の規範となっています。

プラトンは形而上学と一体になった倫理学を初めて確立しており、その特色は「**知は徳である**」というソクラテスから引継いだ主知主義的なものです。

プラトンは経験主義のような人間の感覚や経験を基盤に据えた思想を否定しています。感覚は不完全であるため、正しい認識に至ることができないと考えたからです。芸術はイデアの模倣に過ぎない現実の事物の模倣に過ぎないとして、芸術に価値を見出しませんでした。

### アリストテレス Aristotelēs

前 384～前 322(62 歳)のマケドニアの人。父はマケドニア王の侍医でしたが、幼くして両親を亡くし、若い時代の詳しい遍歴は定かではありません。17 歳にしてアカデメイアに入門し、約 20 年間学徒としてここに留まります。年齢が 43 歳も上の師プラトンからは「学校の問題」と絶賛される際立った存在でした。

当時、ギリシャの諸都市国家は常に相争い、遂にはペロポネソス戦争でギリシャ全体としての勢力を大きく損ないました。彼は「ギリシャ全土が協力しあえば、世界を征服できるであろうに」と残念そうに述べています。アテナイではその後にアテナイを併合するマケドニアへの反感が強い勢力が存在したために居辛くなり、プラトンが亡くなると、アリストテレスはマケドニア王フィリッパス二世の招聘を受けて、当時 13 歳だった王子アレクサンドロスの家庭教師となり、弁論術、文学、科学、医学、哲学を教えます。彼はこの教育を通じて自分の理想をアレクサンドロスに注ぎ込みました。アレクサンドロス三世が即位し、父・フィリッパス二世の遺志を継いでギリシャ全土を制圧して統一国家を作り上げ、更に帝国樹立に向けて世界制覇に向いました。

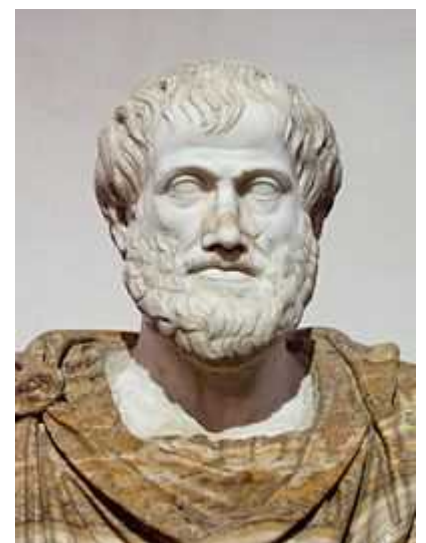
即位の翌年の前 335 年にアリストテレスはアテナイに戻り、郊外に学園リュケイオンを開設し、若者たちを指導しました。弟子たちは学園の歩廊を逍遥(ゆったりと歩む)しながら議論したので、**逍遥学派**と呼ばれます。アリストテレスは経験的事象を元に演繹的に真実を導き出す(近代的)分析論を重視しました。観念論的な師プラトンとは全く路線を異にしています。彼は学術の用語や概念を確定するための論理学、形而上学、美学、倫理学、政治学、歴史学、自然学まで「凡そ人間が考えられるほどのものはことごとく手を付けた」と評されます。倫理学では「人間の営為には全て目的があり、目的の最上位には**最高善**がある」とします。また「理性的に生きるには、中庸を守ることが重要」と説きました。ゴータマ・ブッダの教えと通底します。

著書「政治学」には「**人間は政治的動物である**」との言葉が見えます。自然学(第二哲学)で最も成果を挙げているのは生物学で、特に動物学の研究は系統的、網羅的な経験事実の収集です。数百種類の生物を詳細に観察し、多くの種の解剖も行っています。ニワトリの受精卵に穴を開けて胚の成長を調べ、海岸で生態を観測してクジラやイルカが魚類ではなく哺乳類であると検証したのもアリストテレスです。

著書「政治学」には「**人間は政治的動物である**」との言葉が見えます。

自然学(第二哲学)で最も成果を挙げているのは生物学で、特に動物学の研究は系統的、網羅的な経験事実の収集です。数百種類の生物を詳細に観察し、多くの種の解剖も行っています。ニワトリの受精卵に穴を開けて胚の成長を調べ、海岸で生態を観測してクジラやイルカが魚類ではなく哺乳類であると検証したのもアリストテレスです。

これ等の超人的な業績により、学問の世界では彼は「**万学の祖**」と尊敬されています。その恐るべき先見性はヨーロッパの知識の総合力がアリストテレスを凌駕するには、デカルトやニュートンが出現するまでの



2000 年近くを要しています。余りに権威が神格化されたために、幾つかの彼の誤った認識もそのまま世代間に引継がれ、それを改めるのに大変な労力が必要なほどでした。

## 2. ギリシャ・ローマの支配階級の人口減

支配階級が生殖適応という意味で、悪い選択をすることがあった。一般的な誤りは都市に住むことだったに違いない。たいていは感染症のために都市人口は落ち込んだ。……例えば熱帯性マラリアはイタリアに昔から存在していた訳ではないが、古代ギリシャ・ローマ時代に半島に上陸して徐々に半島内に広がっていったことが判っている。天然痘がイタリアにやって来たのもかなり遅く、この二つの強力な病気が加わったことが、ローマ帝国の支配階級の人口の落ち込みに結びついた可能性がある。

支配階級が進化的に見て明らかに悪い選択をすることがある。古代ギリシャ・ローマ時代に、キレナイカ(現リビア)の細長い沿岸地帯に育つシルフィウムという植物があった。その植物の樹脂は避妊と堕胎薬として使用された。月に一度、エンドウ豆大の樹脂を飲むだけで、避妊に非常に効果的であるらしかった。やがてシルフィウムの人気が高まり過ぎ、……稀少になればなるほど価格が上がり、とうとう同じ重さの銀と同程度まで値段が釣り上がった。すると、過剰な採取は更に進み、やがて歴史で始めての人間が原因となった絶滅種の一つとなった。……出生率は顕著に抑えられたに違いない。

(「一万年の進化爆発」 p136~137 : G.コ克蘭、H.ハーペンディング／日経 BP)

## 3. ローマ帝国が滅亡した理由

ロムルス等によるローマの建国は前 753 年、西ローマ帝国がゲルマン民族の侵略を受けて滅亡したのは 410 年ですから建国から通算 1,163 年間、国体が存続しています。

東ローマ帝国がオスマン帝国の侵略を受けて滅亡したのは 1453 年ですから通算 2,206 年間の長きに亘って、国体が存続しています。

しかも、その最盛期が非常に長く、今日のグローバル文明(西欧文明)の創造者として世界史において大きな存在であり続けています。

世界史に燦たる強国はアレキサンダー大王のヘレニズム世界、イスラーム帝国、モンゴル帝国、大英帝国などが在りますが、その存在感と世界文明に与えた影響力では、断然トップの位置を占めます。

それだけに、この大帝帝国が何故、崩壊したのかは古来から「ローマ衰亡論」として多くの識者たちの関心を惹いてきました。

本文ではモンタネッリ氏の文で総括していますが、その他にも次のような種々の理由が挙げられています。ギボン「繁栄は衰亡の本質を成熟せしめた」「その構造物はそれ自身の重さに圧せられて潰えたのである」と書いていますが、これは「如何なる文明も衰亡から免れることはできない」という古くからある歴史観を述べたものです。これを現代のグローバル文明に当て嵌めて考えるとどうなるのでしょうか。

大きな方から、これまで挙げられてきた衰亡の原因を並べて見ましょう。

- (1) 政府の経済破綻説：「ゲルマン民族の侵入を防ぐだけの軍事力を維持する経済力を失っていた」。確かに結果から見ればその通りですが、これには「帝国全体としては経済力を失っていないが、政府が徴税能力を喪失してしまった」という意見と、「帝国全体として経済力を失っていた」という意見が拮抗しています。この点は、明治維新の徳川幕府と武士階級の経済力と対比すると面白いテーマです。
- (2) 国家財政に与える福祉政策の重圧：都市に集まってくるプロレタリアに対して、社会不安の原因にならないように、食糧や娯楽が無料で提供される高福祉国家へと変貌しています。
- (3) 対外膨張の停止が戦利品や奴隷の流入停止となった経済的打撃：ハドリアヌス帝以降の膨張政策の停止は安価な奴隷労働に大きく依存していた経済を困難にしています。戦利品として得た奴隷も、年季が明ければ解放されます。膨張期でなければ、成立しない経済体制であったのかも知れません。
- (4) 官僚制の肥大による財政破綻：1 世紀頃には所得の 10%程度の税負担率であったのが、4 世紀半ば



には 25%～35%に増加しています。ユリアヌス帝は大きな支出項目である軍隊を兵器の近代化に投資して戦力を下げずに兵員数を減らし、行政改革を行なって高官数を 4 人に、秘密情報官を 17 人に減らし、税率を低くして経済活性化を図っています。だが彼の死後 20 年では高官数は 200 人に、秘密情報官数は 3000 人になるなど、直ぐに元の状態に戻っています。

#### 4. 「ローマ帝国衰亡史」の著者ギボンの擱筆(かくひつ)の辞 (著作を終えるに当たっての言葉)

「私が自分の庭園の四阿(あずまや)の中で最後の頁の最後の数行を書いたのは、1787 年 6 月 27 日の夜 11 時と 12 時の間であった。私はペンを擱(お)いてからアカシヤの緑陰に蔽(おお)われた歩道を幾返りか行きつ戻りつしたが、そこからは辺りの平原や湖水や山々を一眼に見下ろされた。空気は温和で空は清明に、月の銀球は水面に反射し、全ての自然は寂としていた。私は自分の自由の解放と、そしておそらく自分の名声の確立に直面して、喜びの最初の激動を隠しはすまい。しかし、私の誇りは忽ち押しひしがれた。そして自分が旧来の友ともう永遠の決別をしたという考えによって、また自分のこの『歴史』の未来の寿命がどうあるにせよ、歴史家自身の生命は短く無常だという考えによって、沈痛な陰影が私の心を蔽い被らせた」。

(「ローマ帝国衰亡史」ギボン／岩波文庫：村山勇三訳)

#### 5. 「史記」の著者・司馬遷の擱筆の辞

「こうして、漢初以来百年の間に、天下の遺文、古事はことごとく大史のもとに集まらざるはなかった。大史公の官職は、また談から遷へと父子が相継いだ。……そこで、天下の散逸した旧聞を網羅し、王者の事跡のおこるところについて、その始めを尋ね終わりを察し、盛世を見、衰世を観察し、事実にあてはめて考え論じ、ほぼ三世を推定し、秦・漢を記録し、上は軒轅(けんえん：黄帝)から記し始めて下は現代に至るまで十二本記を著わして既にこれを条理をたてて記載した。……およそ百三十篇、五十二万六千五百字。『大史公書』と名づける。……正本は名山に所蔵し、副本は京師において、後世の聖人君子を待とうと思う。大史公自序第七十を作った。／大史公曰く——自分は、黄帝より大初に至るまでを述歴して、百三十篇を以って終わった」。(「大史公書」は三国時代以後「史記」と呼ばれる)

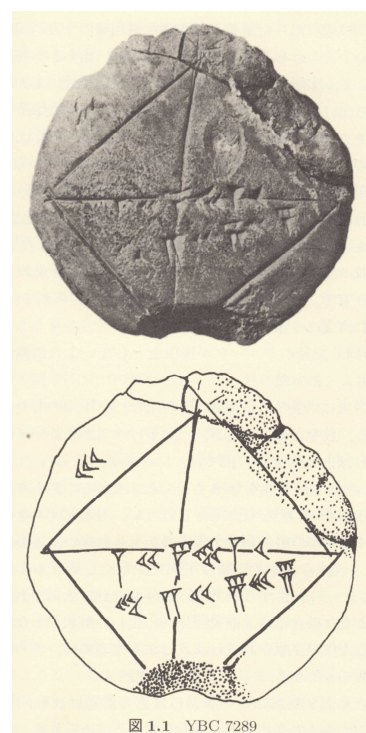
(「史記」司馬遷／野口定男訳：平凡社)

#### 6. 数学の源を辿ればバビロニア！

「3. 人類最古のメソポタミア文明と中東文明」に「前 2000 年以降は古バビロニア時代」とあります。シュメルとその後を継いだバビロニアでは六十進法が用いられました。これは、60 が 2, 3, 4, 5 の最小公倍数であるために約数が多く、除算に便利だからだと理解されています。楔形文字には 1 から 59 に対応する数字があります。これは内部に十進法を含み、横の楔 (<) が 10 を、小さな縦の楔 (V) が 1 を表しました。

またバビロニア数学の六十進法で特徴的なのは、1 未満の数を表す際に、小数の概念が存在した事です。ヨーロッパ世界では 1 未満の数を表すにはエジプト数学より導入した分数を用いていましたが、計算が面倒であるため、天文学で星の運行の計算をする時など、バビロニアの六十進法が導入されています。角度を度数法で表す際の 1 度未満の度数単位や、1 時間未満の時間の単位が六十進法であるのはこれに由来します。

右図は分類番号「YBC7289」の楔形文字板ですが、四角形に 2 本の対角線が引かれており、水平対角線の下に書かれている六十進法の数字は十進法で表すと「1.414213」で 8 桁の精度で書かれた平方根 2 なのです。4000 年前の古代人を見くびってはなりません。次頁の数表も凄いです。





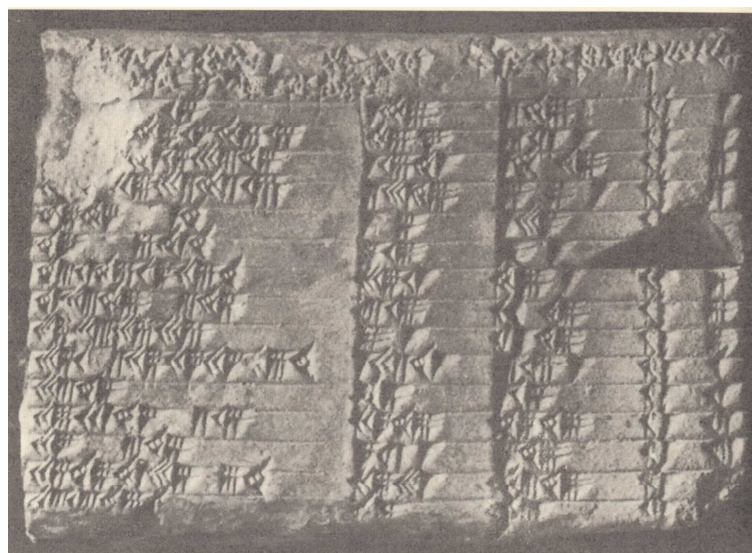


図 1.3 プリンプトン 322

| 表 1.1 プリンプトン 322         |         |         |    |  |
|--------------------------|---------|---------|----|--|
| $(c/a)^2$                | $b$     | $c$     |    |  |
| [1,59,0,]15              | 1,59    | 2,49    | 1  |  |
| [1,56,56,]58,14,50,6,15  | 56,7    | 3,12,1  | 2  |  |
| [1,55,7,]41,15,33,45     | 1,16,41 | 1,50,49 | 3  |  |
| [1,]5[3,1]0,29,32,52,16  | 3,31,49 | 5,9,1   | 4  |  |
| [1,]48,54,1,40           | 1,5     | 1,37    | 5  |  |
| [1,]47,6,41,40           | 5,19    | 8,1     | 6  |  |
| [1,]43,11,56,28,26,40    | 38,11   | 59,1    | 7  |  |
| [1,]41,33,59,3,45        | 13,19   | 20,49   | 8  |  |
| [1,]38,33,36,36          | 9,1     | 12,49   | 9  |  |
| 1,35,10,2,28,27,24,26,40 | 1,22,41 | 2,16,1  | 10 |  |
| 1,33,45                  | 45      | 1,15    | 11 |  |
| 1,29,21,54,2,15          | 27,59   | 48,49   | 12 |  |
| [1,]27,0,3,45            | 7,12,1  | 4,49    | 13 |  |
| 1,25,48,51,35,6,40       | 29,31   | 53,49   | 14 |  |
| [1,]23,13,46,40          | 56      | 53      | 15 |  |

注意：括弧の中の数値は修復後のものである

左上図は分類番号「Plimpton322」の4列からなる楔形文字板、右上図はその翻訳版です。一番右の数値列は「その名前」とあり、1から15までの連続番号です。右から2列目（表 1.1 では  $c$ ）には「対角線の数を解く」、右から3列目（表 1.1 では  $b$ ）には「幅の数を解く」との見出しが最上段についており、長方形の対角線の長さ、短辺の長さを与えています。一行目の六十進法 1,59 は  $b=1 \times 60 + 59 = 119$ 、2,49 は  $c=2 \times 60 + 49 = 169$  を表します。この場合の長辺を計算すると 120 で、この三つの数はピタゴラスの3数（直角三角形の各辺が整数）です。同じように、第3列は  $b=4601$ 、 $c=6649$  で計算により  $a=4800$  でこれもピタゴラスの3数で、以下どの列も同様です。右から4列目（左端）は「対角線の…」とあり、…は読めません。各行の数値から判断して、この列は比  $c/a$  の2乗、 $\operatorname{cosec}^2 A$  の値になっています。A は右の図 1.4 にあるように、辺  $a$  に対する角であり、 $\operatorname{cosec} A$  です。

第一行は 1.983 と書かれていますが、第一行の  $a=120$ 、 $c=169$  でした。 $(169/120)^2 = 1.983$  です。以下同様。各行ごとに数値を比較すると、一行目の 1.983 から最下行の 1.387 へ向かって一様に減少しており、角度 A は 45 度の少し上から 58 度まで一様に増加しています。

今のところ、この楔形文字板は最古の「三角関数表」であるようです。バビロニア人はピタゴラスの定理に馴染んでおり、整数論の基礎にも通じており、理論を実用につなげる計算技術も持っていたのです。1000 年後の世代のギリシャ人がピタゴラス等の数学者を輩出する前のことです。古代人は決して原始人ではなかったことを銘記してください。（「ピタゴラスの定理」E.マール／岩波書店 p7〜）

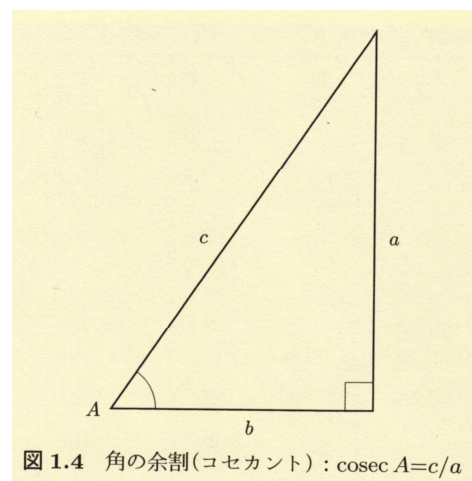


図 1.4 角の余割(コセカント) :  $\operatorname{cosec} A = c/a$